

二月三日

林 大學頭
井戸 對馬守
伊澤 美作守
鶴殿 民部少輔
松崎 滿太郎

昨二日七半時城ヶ島ヶ七八里程沖合ニ異船一艘相見へ西ヶ方へ走り居候趣同所詰番人共ヶ注進申出候段相州陣屋詰家來ヶ者ヶ申越候段井伊掃部頭家來共ヶ私共旅宿へ届出候所同日午刻過異國船一艘安房國白子村地先ヶ四里程沖合へ相見申西ヶ方を向走候旨同所遠見番所ヶ申出候段北條陣屋元ヶ申越候段松平下總守家來共ヶも届出申候依之不取敢此段御届申上候以上

二月三日

林 ……
井戸 ……

異國船壹艘房州崎より勝山沖へ乗込候旨申聞候書付
二月三日

伊澤 ……
鶴殿 ……
松崎 ……
池田 播磨守

急船問屋
西宮屋九郎右衛門船

茂 助

右ヶ者上乘いたし御仕立船房州大房崎沖ニ見張罷在候處異國船壹艘同州崎ヶ勝山沖へ乗込候を見留候旨只今注進申來候此段申上候以上
二月三日
池田 播磨守

六七 徳川齊昭書付「兩田宛(推)安政元年二月七日

「二月七日御下御留もの在中 但少々取捨」

書付
之品

忠 太夫
誠 之 進 へ

今日牧野此間中不快押居候所今日引の外五人へ逢申候何レも今日ハ決心致候故か様子もよろしく

昨日伺ニ相成候處其通り申付候様ニとの事ニて大學初承知致し今朝發

足のよし十日方應接ニ可相成との事万々一老中へ逢不申候てハ承知不

致事ニ候ハ、老中罷出逢大學頭同様可申との事ニ候

一別紙朱書控ニ通り認候をも爲見候所阿部ニて受取應接次第夫々相談扱

可申との事又今日も御手薄等の咄々色々嘆息致候故例の竈の事但し先

申候へハ竈製一萬兩竝楯船の義も應接相濟候ハ、直ニ被 仰立候様

にと一同居候所ニて阿部申聞候楯船の事ハ昨年ハ度々申聞候所一昨々日阿部

何分其中ニて御願通り右ニ付候てハ無滯出帆致候へハ竈の事と船の事ハ

可致と微聲にて申聞候

家老ハ成共表向申達候心得ニ候

御臺場ハ三ヶ所ニて四十万餘懸り候よし乍然末皆出來ニハ不相成是

先日河内守咄御臺場も楯船も同様の事ニ候へハ御拵ニて御預リニ被成候て

よろしくとの事ニ依申聞候

楯の鐵も十五万もかゝり候ハ、出來候仕方も可有之哉尙又鐵鑄筒彌

出來候上ハ表の方二枚を鍛鐵ニいたし裏へハ右鑄鐵を付候ても可然

存候

一朱書別紙ハ寫置可申候

此度之應接を於承知は必所々へ疑敷漂流可有之但し魯夷墨夷ニて直ニ漂流

あふれ者成とて可從候を漂流候へハ此度之應接事濟候ハ、直ニ漂民取扱振御治定ニ

て 天下へ口達を出し可然候衣食等ニハ事缺不申様尤此方の人用候

品を遣候義勿論之先ハ任せ申候共不通振ニて可然此地の人へ逢セ候

義ハ勿論人家を隔候處へ小く居所拵廻りを嚴重ニ圍内へ出候事も他
 へ入候事も不相成様致し番人付置可然候此地の人と交り候事不相成
 候へハ地理人情不相分彼も術を施候事も相成間敷候
 異人來りて云々申時ハ所々出候て歩行得させ候時ハ万一喧嘩等いた
 し打殺され候節不宜故大切ニ致し置長崎迄送歸候よし答可然兎角濱
 遠くの所へ指置可然か是ハ万一にけ候節召捕候節の爲也
 異人來り候節如琉球逢せ候ハ不宜過日長崎へ遣候へハ道中ニ可有之
 故長崎ニて受取候様申歸し候て可然か
 大島八丈蝦夷等ニ候ハ、直ニ長崎へ送り候方可然か
 二白於長崎石炭出所候事
 二月七日於控所書

六八 徳川齊昭書付「兩田宛」安政元年二月十一日

二月十一日御下ケ

御留もの 墨夷を横濱へ葬候事ニ付

書付
之品

忠 大 夫
誠 之 進

扣

只今受取候書中ニ斃夷一疋於浦賀埋葬云々ニ付吊ひ不申證據を取可然由
 御咄申候處退る考候へハ切支丹之法にてハ吊等ハ一切無之哉にも相覺候
 へハ中濱万次郎へ彼地の葬禮并年廻等の有無委曲早々承り林家等の腹へ
 入置候て以來吊ニ参り候事ハ不相成由申聞万々一云々申節ハ彼方の法を
 申聞どの道以來不來との證文を取置可然存候也

二月十一日即刻

水 隱

松 伊 殿

六九 徳川齊昭書付「兩田宛」(推)安政元年二月

忠 太 夫
誠 之 進

昨日河内并太郎左衛門乗切林等の許へ行但我等遣候書面を持參にて行今朝より對談にて夫より又のり出し我等が登城の節母方右老中へ申聞候後老中ニても我等にて直ニ逢候様申聞故逢候て色々聞候處如何ニも剛情應接場見分ニ上り候ても一書を出し候迄ニて此方申候義ハ一切不聞振ニて右書の返翰を明日致し候様ニと申何事を此方申聞候ても取合不申やゝもすれは江戸へ行と申候よし應接場へ入候節ハ何か所々見廻し又ハ屏風の繪杯ニ心を付兎角弓斷不致様子のよし□支配の申ハ船へ此地の人行候節ハ諸所見セ候へは女位ハ出して見セ候とてどうさも無ニ夫さへ出さぬ杯色々申候よし尙又右之節ニハ有之間敷候所人家へ入品を取吞食致候故右様の事不致様アリダンスへ申聞候處拙者ハ委曲承知致居候へ共支配共は多人數故不行届杯申候てかまゐ不申よし

如何ニも此方申事ハ一切不聞振ニハ指支候よし魯夷を長崎ニて取扱候義杯は能存居り應接致候とても長崎應接同様分る故役人ニてハ應接のセんも無之故直ニ江戸へ行老中へ對談致候とのミ申候由如何ニも穩ニ見セ候所々弓斷不相成と皆々心配致候河内江川杯も同斷申聞候先日遣候さし袴羽織ニて昨日出候とて河内ハ今日も右袴用居候江川ハ股引ニ一今日も□の論ニ相成り候てハ老中初甚心配の様子之河内申聞候ニ大名も宿ニも委く衰候様子との咄有之候故たとへ此度ハ先ツ無事ニ歸り候共警固ニ出候大名ハ巳年迄ハ勤御免可然と申候處老中も尤と申候へき一出交易ニて承知致候へハ無此上候へ共中々承知致し申間敷候伊加大和ハ心配ニて色々申聞候へ共内地交易の義ハ必後患有之とて我等ハ同心不致尤伊賀大和も右を濟セ候ニハ無之三五年立候ハ、其内ニ内地交易をも濟セ可申様子ニ申聞候ハ、可然との計策ニ候へ共我等ハ夫以同心不致候一體夷人の腹分り候へハ計策も致し能候へ共不分ニ指支申候若

々山路ニ子狐つかひハ町奉行支配ニ候へハ是迄應接の書陰へ置候て夷人の胸中を此方へ取り其上ニて一策致候も可然歟杯歸りの節駕中ニて獨り考申候委曲ハ明日可申聞候へ共先ッ此段極秘申聞候直ニ火中

七〇 徳川齊昭書付

安政元年四月

「甲寅 墨夷測量之儀ニ付閣老へ御書案

御筆」

墨夷測量之事も例之通り四月十三日之御達柄ニて駟も出ニ不及候へ共拜見之上ハ左ニ申候

一十六日於營中御咄し申候如く林等と筒井等とハ何となく向ニ相成居候故ニも候哉先ニ筒井等への御達ニ墨夷の外懸り被 仰付候よし御達シニ相成候處前文十三日之御達面を一見致候へハ林目論の通り川路等三人へ御達ニ相成何も御爲筋之義ニ候ならハ如何して最初ニ何レも懸り

を不被命墨夷の外と被 仰付候哉察する右ハ林家義墨夷約定之義筒井等不服候故墨夷之方ハ林等へ任セ筒井等ハ御免頼候半故其通り御達ニ相成扱林事ハ墨夷懸り筆^{頭脱カ}ニて諸事墨夷の願相濟セ候義ハ林ニ候へハ此度之義たとへ誰々下田ニ居候とも不容易と存候ならハ林ニて相願鞍馬ニわたかまり束ニ参り候て後憂無之様扱不申候へハ不相成處を自分ハ不參幸川路初三人彼地ニ居候故云々と申立候て林義自分のかれ候建白を御用ニて其まハ川路初へ御達相成候義如何の様ニ存候

一愚考ニ五ヶ月相立云々と申義先々十三ヶ月に可參と申と同事ニ相成り果して六ヶ敷事ニ相成夫々墨夷懸の筆頭林家ニて不參前文の通り申候を其まハ御取用は如何と存候直ニ林家自ら参り解ふせ不申候てハ不當の事と存候疑らくハ此測量の事布恬の策ならん
右之外夫々議論も有之候へ共詰り早くか遅くか戦ニ相成外ハ無之候へハ兼ても申候通り一日も早く御武備整大船大砲數々御出來之外ハ無之

其中にも事出来候ハ、無已故不足のまゝニても戦争の外有之間敷候追々申候如く三港ハ御免被遊候上ハ今更無已候へ共其他へ來り候ハ、無二念打拂候様日本中へハ御達にて可然存候打拂の御達ニ相成候へハ國々の勇武并手當も整申候只今の如くニてハ何年立候ても出来候義安心不致候御書類尙又熟覽可致候へ共前文測量之事有之候故此たん早々申進候也

七一 徳川齊昭書付

安政元年四月

大意

阿部殿存意書取を御筆にて御書拔候分別ニ合本ハ寫あり

御勘定奉行等認出し候

文照院様御廟所御靈屋御普請ハ御備御引立ハ勿論其外ともニ有りと有らん莫太の御入筋認尙又

此度 御所炎上大阪石垣御普等品々相顯し此節なから請説カ

京地の義御危略ニ相成候てハ不相成候ニ付相成丈御指急御普請をも御取懸被遊候義御代替り大奥向御人御減且又御慰事一切不被遊御手元ハ御省略被遊 天下の御爲ニ被遊候處右ニてさへ御勝手追々の仕來りニて御不足立如何とも被遊方無之上にハ此度非常の御改革被遊 御趣禁裏へ拘り候外ハ一同ニ非常の御改革被遊候天下の御爲ニ可被遊 御趣意ニ有之所必定下賤物ハ勿論士分ニも無心の者ハ彼是浮説流言等可申ハ指見候へ共二百餘年の御厚恩相辨人々力を合セ上下一致いたし是迄の御國耻御引返し可被遊との
思召ニ候へハ御役人ハ一統心を用ひ御取御行届ニ相成候様可被致表方の旅ハ人々質素儉約相用無用之義相止武備を勵ミ人馬兵具手厚ニ相成候様可被心懸候段被仰出候若右ニ臺慮ニ背候者有之候へハ二百餘年の御厚恩忘却之義と被 思召候故二度無御沙汰夫々嚴重被仰付候事

四月

右之通被 仰出候故向々被相觸候
右之通相觸候條可被得其意候
右之氣味ニ一度御觸を出し置候て御存分御改革可然か

昨日認候ケ條の中ニ入候品御入國以來壯大ニ相成候ハ守院と存候是ハ
死人追々溜り候へハ布施も多取り候譯ニ候へは百石ニ付百足の割ニて
上下寺への送り物法事等も右ニて致候様達ニ相成候てハ如何

付報中ニ金錢刀劔の類何品ニても天下有用の品一切入候義嚴禁可然
事

一ツ御所之御普^{不明}□ 公邊ニて被遊候ハ勿論ニ候處遊女出家の外ハ男女ニ
不拘十五才以上ハ一文ツ、指上候やう天下へ御觸ニてハ如何^{一ツニハ}
^{相成ニツニハ天下の}
^{人別を爲知ニ可然}

七二 徳川齊昭書付

安政元年五月廿一日

扣

兩三日ハ氣候相直り同慶々々扱ハ石川島にて製造の船其筋の者一覽爲致
度よし加賀守薩摩守等々家來へ懸合有之ニ付過日申達候所先ツ見合候方
と御差圖之よし一應御尤ニ候へ共大艦之儀ハ方今必用の廉を以去年九月
より追々御觸にも相成候様一隻とも多く製造いたし候家有之候へハ
公邊御爲ニ相成候義□處一覽さへ斷り候様ニてハ自然製造の氣を拆き可
申哉と懸念いたし候間今一應福山へ覆議被致加州薩州ニ限らす一覽申込
候□□^{不明}姓名等□□ 公邊出役人へ相達扱又 公邊出役人へ願出候向
ハ姓名を名乗出役のものへ相廻し互ニ見張候ハ、何等不取締も有之間敷
存候仍申入候也

夏五念一

水 隱

松 河 と の

徳川齊昭親書（安政元年五月）

二白始の製造故國持等家來へ爲見候ハ外聞不宜様ニも候へ共物事始
メ全備いたし候もの無之却他家ニ功者有之候而非を打候ハ、存分
ニ承り取用ひ度事ニ候不盡

○別紙此後製造の木積リハ未出不申候哉 公邊の方積出候上拙家ニて
も取調先ハ早く其筋へ催促ニ致度候積り書出候ても木寄ニハ手間も
取れ其中職人只食せ置候へハ御費ニ相成候故如才ハ有之間敷候へ共
又々乍序御催促申候事

誠之進様

河内守

貴下

以手紙啓上仕候薄暑之節愈御安泰御勤珍重奉存候就ハ先頃は罷出初
得拜顔御内々御世話ニ預り厚辱奉存候一昨夕は從
前中納言様御書被成下謹而難有奉拜見御沙汰之趣乍恐御尤之御儀奉存
候依るは昨日速ニ伊勢守に申聞候處昨今殊之外御用多御座候故哉何と

も否之挨拶不申聞候右ニ付ハ御請之儀追日延引仕奉恐入候大船之木
材積り之儀是又御沙汰之趣奉畏候追々取調之模様も相付可申間彼是以
近日申上候様可仕候夫迄之處可然御含置被下候様奉頼上候先は右申上
度早々如此御座候以上

五月廿三日

猶以時令折角御厭可被成候以上

七三 徳川齊昭書付〔松平河内守宛〕 安政元年六月朔日

〔安政甲寅六月朔〕

御書

松平河内守へ御宛被下之
御書案并歌

不定之候作方如何と令懸念候先以無恙大賀抑過日初来臨之節何ぞ可承
存候へきか俄之義心付無之所武事勵れ候由故此兜弊國産見苦候へ共豫被
加攘夷具候ハ、大幸候也

夏六朔

松河との

百あまりはた二筋のすじ兜

すじなき事ニ身をな果しそ

一笑く呵々

水 隠

七四 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」 安政元年六月

「安政甲寅六月 御徒目付役席の儀萩右衛門上書御下ケ上書ハ別ニ綴ル

御書

書附

誠之進へ

本文之通りムドツケをぎすせより申聞有之處歩ハ歩にて可然と申候正論之様ニ被
存候數年歩にて引立外轉可申付ハ惜き人物抔申ニて無據ハ格付候も無已
様に候へ共歩役の人一同小ニ相成候ハ如何いたし候か右ニては歩は無之

事ニ可相成候先年歩迄目見以上ニいたし候とハ譯相違之様ニ候先年同心
迄普代ニ致し候節ハ人々よろこひ候へ共今ニ相成候ては只長屋ふさきの
ミニ相成候類と被致候ムトツケをぎすせ上書遣し此段申聞候
一豊田方も云々度々申聞有之候故蘭學云々之義も早々埒明候様いたし度
候

一暑邪ニ障り候よし大切ニ可致候

七五 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」 安政元年夏

「安政甲寅夏

御書

橋本卿へ御焼及の短刀被進之儀

書附

誠之進へ

一橋本へ遣し候刀并短刀何レカ可然哉之事

只今八藏共申談候處刀ニ候へハ八雲形も大方ニ出及味も相應故よろ

しく脇指ハ及味ハ極よろしく様の節八藏見候よし候へ共八雲鍛ニ無之短刀の方
ハあまり八雲出過候ハよろしく候へ共右ハ堅炭ニて焼候と覺候へハ
及味如何可有之哉尤とにあて見候ハ、及味の善悪ハ大方ニハ相分り
可申候

公家ニてハ短刀の方可然とも存候へ共たとへ拵等不致其まゝ仕舞置
候共刀の方出来もよへ候ハ刀ニ可致哉相談の事

今日ハ灸治致候故以書付申聞候尙一覽之上否可申聞候依三刀爲見申
候

七六 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」推安政元年

「御筆 九月十七日御下ケ」

書附之品

誠之進へ

昨夜簾中咄ニ一橋手紙來り候處御守殿御産以前ニ參り騎射等をも致

候筈ニて其後御産後と申ニ相成り最早御産も相濟候處餘り久しく不參
故參り申度何日頃參り可然哉云々申來候由ニて我等へ聞候故何れ誠之
進へ申置候へきか定て相談中と相見え申候内實ハ川路等へ騎射をも見
せ申度然ハ一橋へ訓練をも見せ申度彼是手間とれ申候云々ニ申候へハ
何れ簾中分誠之進方聞合せ挨拶可申遣と被申候故定あ今日杯相談い
たし候事と存候訓練の義御産前ニ見せ候筈の處今ニ不整義あまり外聞
悪く簾中へも申聞兼候次第政府にては如何致候哉やハリ來月何日頃と
か相定夫までニ訓練の方出來候様致候方可然か此姿にては春にも相成
候とても安心不致又一橋ニてハ川路等の事も不存候へハ此度行候ハ、
又く何へんも押返し申來り候ハ如何ニも一橋へ對し候ても阿部川
路等へ對し候ても氣之毒故とても訓練出來不申事ニ候ハ、いつそ出來
不申よし阿部へ申達御軍政御改革之義も我等御免致候半かと存候忠大
夫へ相談致し置可申前文之義ハ必今日の中ニハ誠之進へ簾中分相談

有之義と存候故含迄ニ内々申遣候故忠大夫へ早く相談いたし置候方と
存候

一臺畑を調練場ニいたし候ならば當時ハ木の植かへ時節故今の中可然か
火中

七七 徳川齊昭書付〔老中宛カ〕(推)安政元年秋カ

披閱如諭秋冷相成候處無御障令大賀候扱ハ縷々御申聞之義一々御尤と存
候拙子も此姿ニテハ迎も年増六ヶ敷のミ可相成と再三御免をも相願候へ
共又夫も不叶候へ共強て引候へハ一身のミをいさきよく致候ニ當り候故
是も勤と存任 命罷出候へ共遠慮候へハ近き憂も眼前ニ見え居候へ共又
如何とも可存様無之世態只々恐入候計ニ御座候 徳川御運次第とあきら
め候外無之文略早々達候也御火中
別紙昨日の文出来候ハ、只今の内認申度故持參可致候

七八 徳川齊昭書付〔藤田東湖宛〕(推)安政元年カ

原朱書
書附之品

海防懸り

藤 田 彪 へ

明日便ニ付急相認申候 公邊御用カして石州悴の世話迄ニハこまり申候
御守殿女中下り候人々招候て只今歸り候處故一寸認申候

東 湖 様

石 見 守

机下
一翰致啓上候秋冷之節ニ候處愈御安榮奉賀候先便ハ御細答ニテ縷々被
仰下猶御別紙之趣段々入御念候御事御座候愚息學問之儀ハ量太郎伊豫介
鐵次郎三人之内ニテ可然ト之 御沙汰ニ付右之内ニテ拙家都合宜舖は得
御意候様委細承知いたし何角御心配之程別て忝三人之内誰ニても宜敷候
得共青山之外兩人ハ是迄近附ニも無之量太郎事ハ量助代江戸表カ懇意も
いたし候事ニ付同クハ同人ニ致度尤得ト致愚考も候處折角厚 思召ニテ

御入門もいたし候事ニ候へハ誰へ相頼候とも御門弟之處ハ彌張居置候て御代師範ト相成候へハ君命之廉も相殘宜様存候處御了簡いか、可有之や右之御別心も無之猶御前之御程合も御次第無之候ハ、量太郎へ御文通ニて御申合被下候様いたし度猶小子々も勿論相頼候様可致其方於同人一も都合宜可有之歟ト存候何分宜御了簡可被下候儲又御別紙愚息へ御返書可被下處先便御間ニ合兼被成候旨入御念候御事必御心配被下間鋪く將貴地古御守殿へ

前様御引移被爲成候由ニて不遠御普請御取掛リニ相成候御沙汰之旨ニて御普請御模様ヲも委細被仰下忝追々御賑ノ敷恐悦之御儀ニ御座候乍去如御文意莫太之御用途ニ可有之御懐合致恐察候處此度ハ前様御勤功も猶莫太之御儀ト奉存候へハ從公邊も又格別之御沙汰も可有之御座候何卒御高ニて御加増被爲進候様奉祈候事ニ御座候一將軍宣下も不遠御儀ト奉恐察候處此度社

兩君様是非大納言御任官ニいたし度前文御勤切^{功カ}も被爲在候御砌御願之機會ト存上候間姫君様御厚被仰立^{夫々へも可然御取繕}一橋様も御内願御座候ハ、必御成就ニ可相成過日織部へハ咄合之處何レ江府へ運可申との挨拶ニ御座候へキ尤中山始勿論助才も無之義トハ存候へ共猶盡力御座候様いたし度幸此節御勤之儀ニも御座候間申迄も無御座候得共何分御助力御座候様いたし度ものニ御座候前件量太郎等之義ハ何分宜御了簡之上否不遠被仰下候様いたし度此段得貴意候書面御一覽後は御投火ニ可被下候以上

九月十九日

原朱書烈公筆

令被閱候量太郎ハ年來石見へ出入候上ハいかさま量太郎へ頼み可然御遠方にハ候へ共式部事馬上ニて量太郎へ行讀書いたし候ハ、田見小路馬場の稽古等も出來旁可然候尤量太郎ハ日勤故た分名代と致候所弟量四郎學問ハよろしく候へ共一癖有之且格式も歩士歟と存候へ

ハ石見方ニテ扱にもこまり可申幸量太郎悴勇之助ハ彪の門人にて小
 姓頭之悴にも候へハ量太郎名代にハ悴を頼方可然候
 彪の師範ハ居置候儀茅根等と違ひ量太郎を代指南ニ頼候ハ量太郎
 氣受如何と存候彪より量太郎ニハとかくよろしく頼入候旨運候可
 然候是迄茅根等ハ近附ニも無之よし是ハ近附ニ致候ハ相成事故量
 太郎悴へ頼候とも茅根等近附ニいたし夜中杯ハ會讀ニてもいたし候
 が可然候 公邊御用ニテ日々登 城日々晝食も不致短景にて手廻り
 兼申候へとも石州悴の事ハ大切ニテ候へハ此段申聞候晩景腐眠大惡
 筆推讀可致候也

七九 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」(推)安政元年六月十八日

「六月十八日御下ケ 望遠鏡之儀

御書 戸田殿へ御相談候へ
共御請と申上候義

書附
之品

誠 之 進 へ

過日拜借いたし候墨夷ハ献上の望遠鏡 公邊ニハ天文臺ニ右よりよろし
 き御品數々有之候へ共通例舶來の品ニハ此度拜借いたし候程の品無之候
 へは願候ハ、拜領ニも可相成と存花の井とも相談いたし候處 御守殿老
 女御本丸老女へ咄させ候ても又ハ湯安等ハ云々御本丸老女へ申付候ても
 つまりハ本丹へ問合候上ならてハ申上ニハ不相成と存候へハ却て直々本
 丹へ頼申候へハ十か十此節の事故働ふりにいたし可申候へ共左候時ハ万
 一 上ニてもおしミ被遊候をも可然申廻し候て被下ニ扱候様ニても不宣
又老女へ頼候へハ本丹不歸
服と存候へハ整申間敷候 付てハ誠之進ニテ阿閣の家來ニ逢云々申聞候ハ、
 上御品ハ天文臺ニも數品よろしき御品有之此度のハ御求不被遊自然來り
 候品ニも有之候へハ上 思召を以被下候様ニも可相成如何ニも簡ニひし
 げ多有之候へハひづみて品見え申候故日杯ハさらニ分り不申されバとて
 御品を此方ニテ直し見候事も万一怪我の程も難計拜領ニ相成候へハ直ニ

筒を直し其他手入いたし候ハ、何分有用ニも相成る品と存候處誠之進
和助杯へ内々申候て右拜領之義阿閣へ云々と申事ハ相成申間敷哉先年
望遠鏡も數々取入候へ共皆蘭舶來の品にて此度拜借いたし候程の品ハ無
之候尤 公邊ニよろしき御品無之事ニ候ハ、願候ハ恐入候へ共天文臺ニ
此度拜借の品よりハよろしき御品も有之候事故拜領願度候處可相成哉否
内々承り候やう致度候此方願候て被下ニ相成候てもよろしく又 思召ニ
て被下候へハ尙々の事

若又何そよき工夫も有之候ハ、可申聞候
本文之通り故先ツ 御守殿々云々湯安々云々の義ハ控へ置申候

八〇 徳川齊昭書付「久世閣老宛」(推)安政元年

(前文闕)

可然との義ニ候へハ前文の處ハ如何いたし可然哉御懸ニいたし度

候

評定一座之書面一覽致候處墨夷魯夷蘭夷等へ兩湊御免ニ相成義ハ畢意
御備向いまた御十全無之處より無余儀被成遣候義云々争端を開き候ハ
、右を幸ニ三湊碇泊之儀は勿論其餘御許容相成候かた〳〵をも都御
斷云々兎角忠憤之氣節少く柔懦怠荒ニ流れ云々砲泊等何程御整ニ候と
も盡く空器と可相成云々

何レも明論簡然致候乍然御備十分ニ無之ニ付御近付ニ相成候義は無
餘義候へ共今ハ御旗本并ニ諸藩ニても甲冑を手放し候者杯も有之よ
し三湊の外へ來り候ハ、打拂の御達ニても出不申候ハ、次第ニ忠憤
もくじけ可申只今の姿にてハ益士氣も落候様相成候へハ砲舶も空器
と可相成との論左ニ候へハ打拂御達ニ相成候かたとへ一事出來候と
も日本永世の御爲ニハ御得と存候此ま、被指置候ハ、士氣ハ益落諸
夷漂流ハ必定諸海岸ニ可有之其節目が覺候てハはや打拂も機會ニお

くれ可申全く琉球杯の姿ニ成行可申兵端を開き候ハ、幸三湊を初御許容の品々都而御断云々一通リハ尤ニ候へ共たとへハ墨夷争端を開き候とて魯嘆佛等迄御断ニハ相成兼候半左候へハ申合候て如何様の事も可相成哉ニ存候兎角義理立ヲ被遊候が何よりの御不策と存候書付類返却此段申進候

久世和州殿

右様認可遣存候尤今日遣候ニハ不及事之

八一 徳川齊昭書付〔兩田宛〕推安政元年

海防懸り

書附
之品

戸田 藤田の中

往古より北ハカンサツガ迄を蝦夷の千島といひ西ハカラフト島まで我領

國なる處魯西亞の者追々漁事等ニ渡り中には常住するも不知ニハあらねと隣國の事なれハ是までも見すて置處なれハ不法の事たに無之ハ此先とも見すて置べし此度セチニ境を聞んといへ共往古よりの譯をいへハ右之如クニして此度改て境をたゝさん時ハ是迄見すて置たる人迄も指置兼るニ至るべし且ハ當年代替りニて内地の急務も有之事なれハたとへ強て界を改ん事も五七年をまつべしされとも往古よりの譯をいへハ前文の通りなれハ今境を改る事ハかへつて其地の下民の不爲なるべけれハ此譯がら歸りの上よく可申傳
と云意味ニて御返翰の文言ニ和文ニて認遣し可然誰方々境を定めんと申來るニより幸ト前文の如申遣置候方後來此方の御つよみ成べきか

八二 徳川齊昭書付〔兩田宛〕推安政元年

海防懸り

書付
之品

戸田の中へ
藤田

當土屋の書ハ返書前故明後日返し可申候

土屋ハ申來候趣も尤既ニ先達而筒井ハ申出候書面の頭書ニも京都云々申候ハ、此地ハ漂流ニて彼國の船中に居候人も可有之候ハ直ニ大坂海へ來り可申よし朱書ニ致候事も有之實ニ 京都の義大不案心ニ候へ共今ハ先ツ彼も江戸近海をのみ心かけ候へは先ツ江戸の方御備不行届内ハ 京地までニハとても及兼候半乍然何とか一工夫ハ無之てハたとへ不來迄ニも 京地へ御かまひ無之様思召候てハ 將軍家御爲も不宜候へハセめてハ京近國の大名等へ御達位ハ出候て可然存候所尙考承申候

一魯夷への返書箱等の圖認候へハ預ケ置候故たんすの中へ入置可申候

八三 徳川齊昭書付（推）安政元年

一只今當中申聞候ニ兩田へ是迄逢不申候故今日の中ニ逢可申よしわざ／＼來り申聞有之候故我等十三日ニ駒へ歸り候へハ夫迄ニて可然何も其様ニ急候ニも及間敷と申候處急ニ逢度成候哉御役被 仰付候て一度も逢不申候へハ今日の中逢申候と申候故勝手次第ニ可致よし申聞候定て逢候事と存候何分柔和ニして笑等交セ色々咄し候がよろしくこわき顔杯不致がよろしく候又笑も笑ニより當中を下ケすミ候様ニ取れ不申やう致し度候但し逢と計申候の故側へ呼まミ／＼逢候のか又は遠くへ出初て位の事ニて逢候のか其所ハ不分候夫ニてハ致し方も無之候直ニ火中／＼

極内々御筆入

序ニ云昨日ハ久々にて乗馬一覽大慶いたし候扱夫ニ付一笑の事ハ新御守

殿ニて此方へ被爲入一度も馬御覽無之昨日初て御覽之扱又御守殿御人何
レカ聞込候哉昨日ハアメリカ萬次郎來り候事を存アメリカ唐人か出候と
て見居候所へ彪キ乗馬ニて出候へハ何れがアメリカ人と見え候とて人々
首をのへ見候へハ又戸田が出候故アメリカ人ハ一人と聞候處兩人だと申
皆々見候て咄し候故小川ニてアメリカ人の出候筈ハなきとて見候へハ兩
田故是ハ先々云々の人ニてアメリカ人ニハ無之といへハどをりて最前か
ら人ニ似候へと思ふたとて一同大笑いたし候よし

八四 徳川齊昭書付

安政元年カ

「安政甲寅歟

御筆 關白殿下へ豹の皮被進之儀」

先日咄有之豹之皮昨日來り一覽致候所一ツハ相應一ツハ餘程落申候處
落候方を揃候へハ外ニも有之故二枚ニ相成候へ共上品をさし置落候方

のミ進候も不本意故落候中ニて上品之方へかなり對し可申者を撰ひ候
扱望月より云々故やハリ誠之進等を同人方へ登セ候方可然哉又ハ我等
カ直ニ關白殿へ直書ニて上ケ候方可然哉直書ニ候へハ念も入候て卅金
餘ニて買上候て指上候かど有之のミならず以後の爲も可然御付人へ咄
し有之位ニてするノ進候様成行候ハ、此後何かニ右様の事有之様成
行候てハ此方指支ニ相成候品々直書ニ無之附人の方へ咄候て當人ハ未
知ふりニて取候様相成候てハ際限も無之候へハやハリ重くれ候て直書
之方へハ親しくも相聞え又めつたニねたれ不參爲ニも可然と存候
一厚總之義ハ外ニ考も無之春日縁起平治戰爭等の繪卷物ニ有之もやハリ
當時常ニ用候三ガイの製ニて先日關白殿カ御見セ之通り總付候様ニ存
候

今世上ニて馬の目も不見様ハけ物の如き厚總ハ何ニ有之形か不存我等
の代止候處暴政中又々新ニ出來中納言ハ右をよき氣ニ成用居申候苦々

敷事之

八五 徳川齊昭書付(推)安政初年

一船注文之義ニ付加比丹へ申聞候義左之趣

近來追々外國を交易致度申込も有之所唐和蘭陀之外交易嚴禁之段ハ委曲御承知之通りニて御代替リ初メ御國內の御急務を被差置御祖宗之法を被改候義にて被遊兼たとへ強て御初メニ相成候ても諸侯を初士民不好事ハ摸通り申聞敷兩國互ニ人命をも損し候故大艦御取入五七年も此方の者乗試ミ彌外國へ行事と相成候上ニハ却て外國へ出交易致候ハ内地ニおゐて致候とは譯も相違ニ候へハ此船五六十御取入之義申達候處歸國ニて國王へ申達候上ならてハ出來申聞敷段申聞之趣も尤ニ候へハ其通り相心得和蘭國とハ毎度懇意いたし多年交易をも指ゆるし置候國故歸國の上ハ何分國王へも申通し早々大船蒸氣共數十艘渡來致候様致

東湖加筆
事ハ模通
リ不宜第一
大船無之
ハ難破船之
時ニ人命を
失ひ候へ
此度大船取
入
五七年

度乍然何方にても無用之船と云も無之義と被存候へハ數十艘持來候義指支も有之候ハ、全く形ニ相成候迄ニ七八艘も來春持渡候様左候ハ、於此方製造可致尤此方ニて製造致候ニハ銅入用ニ候へハ無據十ヶ年之内貴國へ遣し候銅指留候故是亦不惡承知致候様

以下原朱書
但シ彼方ニて製シ上ケ候故一度ニ銅入用程被遣候様申聞候ハ、右ハ國法ニて定高の外ハ不被遣候故無據此方ニて船製候云々可申

八六 徳川齊昭書付(藤田東湖宛) (推)安政二年三月

書附之品

藤田虎之介

梵之一事無次第出來何よりの事ニ候脇も骨ハ折候半か殿下不宜候てハ迎も出來不申義此上ともケ様の世態故又ケ様の事有之間敷ニも無之候へハ此事となくバく々色々御焼失以來御骨折も有之云々抔申事ニて三か五か被遣候てハ如何若左様の方と存候ハ、此返書ニ可申遣候何レ松の方明日

徳川齊昭親書 (安政二年三月)

晝迄ニ相認明後朝遣し申候へハ此返書も一同ニ可遣と存候故寫之義早々可申付候
今日安島當番故直ニ可申付と存候所夫ニてハ爲見候義遅く相成候故先ツ爲見申候

(註)安政元年十二月二十三日朝廷太政官符を下して梵鑄改鑄を令し翌年三月幕府亦其令を發す

八七 徳川齊昭書付 (推)安政元年閏七月廿六日

御筆

嘉永癸丑

内外旗印

○此註記内容ト一致セズ

只今中納言より十大夫咄を書取らせ申候よしニて爲見候故則別紙遣し爲見申候本文之通り實ニ魯西亞へ加勢いたしくれ不申様ニとの頼のミニ候ハ、至極よろしく候へ共如何歟と存候死人下田の事も好ましからず候へ共當春應接人ニて指ゆるし候へハ此上何人ニても右之例ニ相成義無已事

と存候

閏月念六夜

- 一 伊豆下モ田湊へアメリカ舟貳艘参り候よし右は船中ニ在る病死之者ヲ葬り度よしにて参り候よし
- 一 長崎へイギリス船参り是ハフランストイギリスト申合ヲロシヤ國を攻候此節ヲロシヤハ御加勢無之様ニと申参り候よし舟之數相分り不申候
- 一 井伊掃部肥後内海御備被 仰付臺場等於 公邊入用御指出ニ相成候上ハ川越忍も内海御備被 仰付候上ハ前文兩人を徴祿ニ候へハ尙更於公邊入用御指出し不相成候てハ相成申間敷祿高の人間を備へ候上ハ小祿ニて外を備候事ハ尙相難く候へハ同日ニ四人共被 仰付外の方ハ大祿之者へ被 仰付可然

八八 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」安政二年

「安政乙卯 魯夷下田應接之儀ニ付閣老へ御書案梵鐘之事

御書

書附

誠之進へ

左衛門を進達の中いづれ少々、齟齬いたし云々御手續ニ致度迄の論紙上ニあるハ尤ニ候へ共一昨年あめりか渡來の節拙老ハ御國法故一時ニ打拂可然申候處御權道ニテ願御取受其中御武備整候て打拂可然との衆評のよし申聞有之殊ニハ慎徳公御不例中旁拙老拘り候事ニも無之一理有之事と承り居候處御取受ニ相成上ハ種々様々の不宜事共ニ成 公邊御入用ハ不一方御武備のミ御片句も被遊兼候事ニ成行候左候へハ本文左衛門ハ云々申候ても中々彼も眼有之梨地を墨塗に致し候て承知致候様ニハ相成間敷長々來り候中ニハ却て此方にて欺れ終にハ邪法迄も弘り候様可相成夫共必定本文ニ通りニ可相成との事に候ハ、川路を下田奉行へ被成本文ニ

通り御扱せ可然於拙老ハ紙上のミニテ術施候てハ難物出來兼候事と存候川路申所ハ兎角魯夷勝手ニ相成候様ニ相見え織部を申上候處尤ニ被存候

一梵鐘之義ニ付御勘定奉行評議の中に

勅書ニハ云々有之候へ共一圓と相成候ては人氣ニ拘り云々認候處一ハ尤の様に聞え候へ共左様相成候節ハ却而平均ニ參り兼候 公邊御役人の如く諸家役人ハ正しき者計ト安心不致候へは或ハ金子等有之出家ハ賄賂を以取繕等いたし候事ニ相成候節ハ出し候者と左なき者と必不平ニ相成候より内亂を催可申何宗に不拘本山并ニ古來の名器并當節時鐘に不用分ハ不殘半鐘罎口に至り候迄も引上候方不平無之候万一右御達出候より時を撞候て以前より撞候ふり抔ニ致候者ハ嚴重ニ被仰付候へハ右を聞及候て左様の事致候者ハ有之間敷候

一於 公邊ハ前認候通り御役人何レも正しく賄賂等を受候て扱候義ハ曾

て無之事ニ候へ共僧侶之義ハ墨夷等の拙者にて如何様の計策を以下役
杯を欺候も難計候へハ随分風聞御聞セニて万々一寺社奉行支配等不正
之者有之候ハ、直ニ屹度被仰付可然事ニ候

一梵鐘を以大小砲御出来ニ相成上ハ於 公邊も兩山を初時を撞不申分の
撞鐘半鐘ハ勿論銅燈籠等統て銅砲の用に相成品ハ不殘御つぶし武器食
器之外銅鐵ニ限り候品ハ格別新規撞鐘半鐘罎口等ハ勿論御制禁ニ相成
候様無之てハ相當不致候へハ僧侶氣受ニも拘り可申事と存候

但し金銀座等ニて銅錫鉛杯ハ元より入用ハ無之品に候へ共近世交
金ニ御用ニ相成候上ハ天下諸人の用を足し候事故是ハ是迄の通り
ニても可然存候

序ニ此義も認遣し候方か

八九 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」安政三年

「安政乙卯 歟

御書

安中侯進呈元込
筒銘字撰之儀」

書附
之品

誠之進へ

墨夷ハ昨年献上も致候手元ハ玉を込候筒を安中にて申付我等へ贈候よし
ニて右へ文字ニても認候ハ、申聞候様ニとの事故菊地へ申付撰候處何そ
外ニも可然文字心付も可有之と存候故相談いたし候尤鐵砲師其中在所へ
歸り候故早く否申聞候様ニと昨日も山運迄申こし候故右之心ニて否可申
聞候

九〇 徳川齊昭書付（推）安政二年カ

「御親書

御拜見後丙丁」

可寫分

有栖川への案文認可申候但是ハ廿五日杯
の日付ニて可然

徳川齊昭親書（安政二年）

一琵琶 献上ニ付關白殿への書面案文可致候是ハ關政改元御前の方之日付可然歟尤改元承知不致前ニ彫候故云々認候なれハいつの日付ニても可然處地震津波等ニて宿々指支候由故 献上も追々遅々致候段認候ハ、可然か尙心付も可有之と存候廿五日方ニハ是非出し候やう致度候へ共何共安心不致候

腹中の文ハ殿下御心得の爲と申別ニ認候を遣候心之添肴ニハ白子浮龜ニても付候て 献上可致哉と存候へとも有合如何可有之か是ハ何レ承セ候上之事

九一 徳川齊昭書付

安政二年

御筆 旭日丸御船卸し仕事師之事

大船之義ニ付過刻云々申聞有之所我等も此間中ハ是迄の仕事師ニて張込不申出不申節ニハ又々彼が可致計策も難計と此所心配致し居候所過刻申

聞候趣も有之候へハ右之者共へ此度ハ全く我等の工夫ニて候へハ其節やとハれ候ハ、勢力を盡し下知を守り出し候様云々何となく含セ置候てハ如何兎角仕かけハよろしく候てももやい不申候ては出候船も出不申候へハ此段申聞候必我等仕かけニて出不申候へハ又々藤兵衛是までの仕事師可然と申ハさし見え申候昨日も面ニあらはれ居り申候へハ何分本文之方へ申聞候様可致候火中

九二 徳川齊昭書付

異國之儀

○前文關
□□□□□□ 勿論八丈小笠原島其他銚子□□□□□□
島々ニハ狄夷ハ來□□□□□□
○此間汚損
○此間汚損
等御遣し田地をも御開キ且又大筒等をも夫々御配當被遊候やう可被遊候左も無之御捨置被遊候へハ先ハ參り住居等いたし申候夷狄ハ万里の海を

へだて來候を我ハ居ながら防候事故彼ハ客我ハ主ニ候へハ一度ニドツと
押寄來候ハ不可恐候へ共日本近くへ足留り島々をこしらへ右島に來り居
り申候て所々の海岸へ來り申候自ら日本事情も相分申候故せめ入候も甚
いたしよく御座候其上所々の濱々へ近キ申候へハ此方にてハ山をこへ川
をわたり難澁いたし船の來り候方へ向申候所彼ハ一大洋故右へも左へも
勝手ニ被參其時ニ日本人ハ大金を費彼か主ニ成り我ハ客ニ被致費のミか
ゝり大小名ハ勿論 公邊迄も御勝手すり切如何とも被遊候義不相成様果
して成行日本も獨りころひニ可相成と日夜憂申候事ニ御座候火災杯も發
候迄も急ニハ無之やゝ久しく下もえニ相成居り其中心附候へハ一人にて
も踏消候事相成候を不心附さし置候て火の手上り候節心附候ても一度ニ
押參り申候故いたし方無之と申様成行申候外患の義ハ先年も申上置候通
り一日も早く御仕法可被遊候先年ハ日本ヲ吞候上にて清國へ手を出し可
申と申上候所此節承り申候へハ清國も戰爭のよし左候へハ清國ヲしたか

へ候上日本へ手を入候事と存候へハ何ハさし置外患の義一日も早く御仕
法被遊候やう奉存候前ニ申上通り此方ハ島々へ御さし出しニ相成居り申
候へハ先ツ押寄候ても足留り無之候へハ格別の義と奉存候さて又追々申
上候通り蘭學ハ邪宗門のいろはにて追々蘭學開け申候へハ邪宗へ文通も
相成申候處風聞き、目あかし等ニハ一切不相分事ニ候へハ是等も又蘭學
いたし不申ハ不相成と申姿ニ相成誰もかも皆存不申候へハ不相成左候へ
ハ本朝用來候文字ハ學者出家或ハきつといたし候節のミ御用ニ相成全ク
表向と相成通用ハ横文字の方便と申やう相成天下一統邪宗の手習いた
し候やうニ相成さて、なげかハしき事ニ御座候乍恐 神君にて門跡を
御つぶし可被遊被思召候へ共思召候様相成兼候へハ無已東門跡を御立兩
派ニ被遊候是ハ少も早く大平ニ被遊候方可然被思召門跡位ニハ御かゝハ
り不被遊先つ兩家ニ被遊勢を御分ち置被遊候て追々思召も被爲有候事一
事の御良策と奉存候處今以兩派とも盛ニ有之候邪宗の義ハ其功術門跡ニ

百倍いたし申候へハ邪宗を以て是迄國々を心長くのみ世界一王ニいたし候よしの巧ニ候へハ容易の思召にてハ行々吞れ申候故今此方へ時々不參内御手當いたし申度事ニ御座候
右ハ上書の中へ書加可申候

九三 徳川齊昭書付藤田東湖宛

書附

虎之助へ

外國ハ心長くいつ迄も如此交易する中ニハ地を出る金銀銅等ハ限りあれば必ス日本の弱ミニ相成其品ハ皆日本を奪ひ取道具と相成ハいつ迄も心長く交易を此地にて窮迫する時ハ必ス交易を斷の外無之斷ハ直ニ向と相成是迄數百年も被遣たる思も直ニ失ひ可申左候へハ今斷給ひても又先へ行て斷給ひても彼ハ本より敵なれハ得を取候内計の事今の内早く斷り給ふかよき之二百年以前を見る時は日本の窮たる故ニ金銀等の吹かへさ

へ初りたれハ窮迫したる確證ニ交易を遅く止給ふ程彼方ハつよく相成此方ハ彌弱く相成者也
右ハ交易のケ條へ加入之事

九四 徳川齊昭書付

過刻兵介ハ一封遣し候跡にて又々相考候へハ御遣訓書拔等と眞田の義と一同ニ致候にてハ少々ひま取レ可申と眞田の義ハ只今認運へ相渡し明朝早々遣し候心得ニ

一御遣訓書拔の方もあまり遅々致候ては不宜候故一兩日中ニハ遣し度事之扱右の如記先日我等認爲見申候處右の中へ北地内願の通り相整候ハ、要路の處々へは二三男さし置守セ可申猶又奥州より先ニハ神君祖の御宮も無之候故第一ニ御宮をも建立いたし北地まで神祖の御威徳を押廣永世北狄の害をのそき可申と年來の心願ニ候處御相談御六ヶ敷歎ニ

候へハ天下の大害とハ乍存崩れかゝり候迄黙候外無之候へ共風と心付
神君御遺訓脱カを開き候へハ如前處御意ニテ實ニ御奉感聞候此地戰國の砌ニ
てさへ異國の事迄厚く被思召候へハ平天下ニ候ハ、如何様ニも海外の
患を御のそき可被遊段ハさし見え奉り云々抔申義認かたし

九五 徳川齊昭書付藤田東湖宛

「五家之儀

御筆

書附之品

虎之介

成瀬安藤竹腰水野中山の義ハ三家共御分ケ被遊候節夫々御附家老ニ被遊
候處其外ニも御附の人々數多有之候へ共最初御分ケ被遊候節家老ニテ御
附被遊候故を以只今ニても一の國老と立置申候處いつの頃よりか申合五
家と相唱へ外家老と別物のやう相成り又候先代の頃より老中等へ或ハち

なミを以頼ミ又ハ賄賂をつかひ候て家格御引立ニ相成於三家難有仕合の
様ニハ候へ共本より五家の者共私門を張權柄我さつニ候處家格等御引立
ニ相成候より以來ハ別て外家老を初家中一統ニテ惡ミ候やう相成扱五家
之者共表は家格等御引立ニ相成候へは三家の威光ニ宜相成よし申内ハ人
々諸大名の眞似いたし三家の家老ニハ無之やうの顔致し申さハ只今ニテ
ハ三家の客分と申如クニ成行申候最初 神君ハ御附の節成瀬安藤抔老中
をも相勤申候へハ只今の人情ニテハ嘸迷惑ニも候半か天下の御爲を存い
さゝかいとい不申御附ニ相成御守立申候ニ今ハ丸ニ心得相違いたし自分
ハ五家と唱候家老のミ家格を引立やゝもすれハ外家老を落し候心底よ
り家中共を扱候義も甚危ニ相成政事の上ニ害のミ多有之候へハいつぞハ
可申上存居候へ共御先代ニハ夫々賄賂等取受候人々も有之かたハ故扣
居候處諸事御改政ニ相成諸大名迄も行列供連等も減候へハ右五家と唱候
家老共の義も御享保寛政の節の通りニ御改メ五節句等御目見も詰席等も

御止ニ被遊五家杯唱候名文迄以來相止候やう御達ニ相成最初神君より御附の通り何レも三家共も大切ニ候やう致度事ニ御座候御目見不被仰出以前ハ御大禮ハ勿論五節旬三日等多分ハ拙家杯ニても中山のミ召連申候處自分ノ御禮と申事初り候よりハ御大禮の節程召連候事不相成譯ニ相成夫か爲ニ永詰申付候家老共も人加ニいたし候やう相成何ニ付候ても家式御引上ニて三家の爲ニ相成候義毛頭無之政事の上ニハ害のミ云々扱又中山義永々江戸ニ在之借金のミ多く相成知行所ハさらニ取ベリ無之候故去ル〇年取ベの爲永々下し置申度由大久保加賀守へ内談いたし候處家老の事故勝手次第ニてよろしき由申聞有之候故申付候處右ニ義を成瀬承り中山義永々下し候やう相成候てハ尾張ニて成瀬をも國へ可遣と申候節指支候ニ付同人ハ御側御用御取次土岐水野等へ申談御聞ニ入候よしニて思召ニて永くさし置不申やう御指圖ニ相成候よしニて備前守永々下し置候とて於公邊ハ御指支ハ無之候へ共毎度江戸ニ居候故先つ一ヶ年下し

候やうニとの事ニ相成申候然ル處今以勝手窮迫知行所取ル不相成候故何レ其中右可申付存候處此節ハ如何の御模様ニ可有御座哉此義ハ序ニ御聞合申度候前文五家復古の義ハ思召ヲ以何卒年内御沙汰ニ相成以後何程三家共ハ相願候者御座候共決して御動しなき様ニいたし度事ニ候一近頃家老共典藥頭の跡と相成候よし故再應三家共ニて申合以前へ復候やう奉願候何卒是も如以前五家へ引つゞき外家老共御流等戴候やう仕度乍然一度近く被仰出候義ニて御達かへ不相成事ニ候ハ、無據候故五家と唱候家老共をも典藥の跡へ外家老の先へ出候やう御引ニ相成候ても引別レ候ニハまし申候三家の家格落候迄ニて政禮ニ害あるニハまし申候故此たん御内々御申上等よろしく頼入存候也

新見殿

一五家家老の義外家老ヲ引上ケ候義六ヶ敷候ハ、云々申遣候處尾ニて

ハ何等答も無之候故まだよろしく候處万一ニも紀より夫ハ不宜と申
こし候節ハ強て出し候事も如何故存切て只今の内新見等へ出し可申
と認申候十九日ニハ出し候故其心得にて見可申候

又曰三家共國力なき時は非常の節 公邊御用ニ立兼家老初不勝手ニて
ハ三家共の用ニ立兼申候付てハ五家も六家も諸大名同様江戸中ニ屋敷
かまへ居り候へハ自ら勝手の爲ニも不相成候へハ不殘賣拂候やう左も
無之ハ不殘於 公邊御引上ケニ相成夫々の大小名へ被下候がよろしく
知行所ニ罷在出府の節ハ三家共屋敷内ニさし置候様思召にて御達ニい
たし度事也右も加へ可申哉誰承り候ても正論のつもり也

九六 徳川齊昭書付

秋冷相成候處益御壯健被爲渡珍重奉存候拙子義も無異ニ罷在候乍慮外御

休意可給候扱ハ當春五家と唱候家老共の義ニつき兩公へ御相談申御國許
へ御申被進候よしニ御座候處未何等御沙汰も無御座候哉於營中兩公御相
談の節ニハ欺レ不申此度ハ如以前可被成よしニ奉承知候か余り御沙汰も
無之候へハ若や又誰申上御欺シニハ無之欺と疑惑いたし候故此だん申上
候何も早々謹言

九月九日

二白順時御厭專一ニ奉存候最早放鷹の時ニ相成御同様得勢申候此鱈魚
不珍候へ共令進呈候已上

九七 徳川齊昭書付

別紙兩通りの如く尾紀家老共々備前守へ相談致候ノミにて同心々以家老
藤田之書拙者へ爲見申候處右ハ全ク五家之者君を蔑ニ致し五家ハ五家ニ
て段々ニ飛のけ候致方ニ有之既ニ□□見えの義又ハ席の義杯を起候節も

拙者義ハ同心不致候へ共終ニ存候様相成此上右様の義追々御濟せ相成候てハ實ニ不容易御附の甲斐も無之別物の如く成行人々權を振ひ候のミにて君の爲ニ成候義且て無之常々ハ邪摩^てニのミ相成万一の義有之節ハ何の用ニも不相成様成行候義ハ必定ニ候諸大夫十人ニても廿人ニても用ニ候ハ、願候ハ格別供ニ六人一同出候義ハ無之又上を尊敬致候義諸大夫の有無ニ拘り候ハ、諸大名ハ皆公義を尊敬不致ニ相當り可申候依てハ此方のミ彼是申候ても兩家へ對し不宜候故拙者義ハ省略中ニ儀故不相願候へ共書加候義ハ勝手次第の由備前守迄申聞候故定て右の通りニ相成候義と存候へ共願出候ハ、一圓不相成様御周旋被致度事ニ候一度相濟候へハ追て取かへしは不相成候故何分よろしく御扱可被成候也

九八 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」

書附
之品

虎之助へ

今ハ外様とても反逆する人ハ有間敷き事なれ共三家初御普代ハ勿論何事有りとても幕府と爲にて常々命を出し置く者なれハ實ハ人々の内實を初家中迄も妻女を幕下へさし置時は非常ニ節千人の人ハ五百人ハ留守居の姿なれハ夫だけ公邊の御損なりされとも外様へ對し皆ニ左様なし難く又ハ人々のさしつかへも有バ何万石以上とかハ右ニ通りニしたき者也却て外様ニハ家中交易も多御普代ニハ少キハ如何の事ニ御普代何万石以上妻子ハ國在所等へ願候ハ、勝手次第嫡子ハ十才とも成ハ非常ニ節の御用に立ハ是迄の姿にて家中の義ハ無已分の外江戸へ妻女子をさし置不申様達度事ニ何程妻女子國在所へさし置かよきとも夫か爲ニ痛と成てハ却て御用ニも不宜義故三家始御普代何万石以上とハ右やうニしたき事ニ

右やうニハ認候へ共是ハ實用ニ處にて海防論の内ニ戰國近き世ニハ大

名へ費をかけ人質として妻子迄引付られたるも尤なれ共又泰平久しき時ハ人々窮屈なる人ハ 徳川の天下ニうむ事有故云々と認置候へハ何万石以上と申からハ外様も同様ニなくハ如何若又三家ハ溜詰杯かとも存候へ共大名ニも心なき人有り小名にも心有る人ありて心有者ハ皆國へさし置可申事故何万石以上抔申候てハ今我身ニ付申とのミ聞え公平の論にても外の愚目ハ左様ハ存間敷乍然ちらとハ書加候方も可然存候

一 大阪奸賊一件の處へ今外様の大名ハ皆發明なれハよけれ共行さき如何様の人も出なハ右奸賊所ニハ有之間敷云々

但し今ハ愚なれとハ申兼る故如右

一 海防論へハ 天子ハ下民ニ至る迄喜悅のやう認候處松前一人ハ立腹と

存候故右ケ條之所へ

「如先年所かへにてハ如何ニて可憐事ニ松前ニても喜悅する様ニ可然膏

先年ハ罪有る故と見えなれ共

油の地被下たらんニハ是も海防等の憂もなく本の大名ニ成て今の町人の様ニ無之故大悦可致事ニ

右ケ條加へ可然

九九 徳川齊昭書付

葬送ハ自分ニていたし法事のミ僧へかけ入用ハ百石何程と御定可然事

一 後宮ハして御旗本迄芝居躍三弦以來御制禁ニ事

一 大奥向へ出家町人ハ音進物頼事一切取受間敷事頼有之候ハ、書付ニ致

させ町人ハ町奉行 出家ハ寺社奉方^{行脱カ}へ可廻事

一 大奥向女中ハ大奥向へ拘り候品計ニて御政事の義一切口出し申間事^{敷脱カ}

一 御役かへ等有之節同役初祝義ニ來り候共酒宴ケ間敷事致間敷事

一 御役々ニハまた者の多少ハ可有之候へ共何分少く可召遣事

一 寺々御代拜以來御止ニ事

- 一 質素儉約御觸ニ相成候へハ衣裳髪飾等總て美を盡ス間敷事
- 一 諸寺院かんげ帳等入申間敷事
- 一 上臈老女他出の節ハ表使々番召連可申事
- 但御三家方御三卿方へ出候節ハ表使不召連候共不苦
- 一 御城々兩惡所場へ見物ニ罷越間敷事

一〇〇 徳川齊昭書付

去ル九月十二日礫へ行見聞之大意左之通り上の方ハ別の事も無之 御守殿様杯ニてハ我等并ニ八郎餘一杯も一同ニ行ごたくとにぎくしき義御満足の御様子ニて御機嫌も御よろしく候へき礫本家老女等又ハ太田とませの類ハ駒込を御直ミさは秋冬杯來り候ハ邪魔ニいたし何の用も無之に早く歸り候へハよろしくと申つり合故御夜食の米位が出候とて何レも歸り申候駒込ニて礫本殿を來り候人を扱候とハ大ニ相違之尤礫ニても民

澤其外駒込ニ付居り候人も有之右筆間杯ハ大方駒込へ付居り候よし總て駒込へ付候人ハ小川初の氣ニハ入不申中臈頭民澤杯ハ太田とませニハ委悉カくいちめられ候て大體の人ニてハ勤り兼候義ニ候へとも民澤ハ心持しかといたし小川初不惡杯口へ出して咄々程の氣生故取つゝ居申候太田とませニてハ時ニ寄候へハ民澤をハ呼捨ニ致候位のよし民澤事ハ何かニ行とゞき且太田とませの如く不敬太田とませ杯時ニ寄候へハ立たるまゝニて中納言御客來り候ても其くセ出候故 御守殿ニても御氣の毒ニ思居候て先ツハ民澤へ何かを被仰付候故太田とませ等ヤツカミテ民澤をハいちめ候よし也 なる事不致候へハ 御守殿ニても同人へ何かを被仰付候故のよし○太田事新御守殿へ當中行食事の節ハ若年寄故飯のハお致し新御守殿の人と並ひ座し居候處新御守殿御膳ハ御たき出し當中のハ湯とりニ候へハ新御守殿ニては湯とりの方怪く御意ニ入候故中納言ニて上り候やう申候へは太田義御飯ハ御くニ分量も有之者被進候ニ不及其様ニのろく上り候てハよくなき杯小き聲ニてぶつゝ小事申候故並ひ居り候新御守殿中年寄甚氣之毒ニ存

候よし一體太田事ハ姉妹何レも妬嫉有之者ニて右故中と新とあまりむつ
ましきハ心よくも無之様子ニ候御入輿以前ハ太田事ハ御入輿過候上ハ是
非く轉くれ候様ニと當中ハ奥御殿へも咄し有之程の人ニて當中ニても
小川太田とませの不宜事ハ其頃ハ何分存し居候へ共轉し所も無之哉先つ
其まゝニ相成り居り申候事と見え申候

○御守殿新御守殿のつり合新御守殿ハ舊冬御入輿ニて互ニなれ不申故ニ
も可有之哉ハ不相分候へ共兩御守殿本殿駒込ノ兩人の人ニ打交候處の様
子を見候ニたとへハ膳を出入致候ニも新御守殿の人手傳ニ出持行んとす
るを取上奥御殿の人へ持行候様指圖致候て奥御殿中臈又ハ當中中臈杯へ
頼ミ候様子尤我等の中臈へハ指圖も不致候所是ハ手の付候人故遠慮ニも
候半か新御守殿の人をハ向ニ致候様子ニ相見え申候新御守殿の人ハ近頃
御入輿の事故何事も御守殿の人の指圖次第遠慮の様子ニ御一覽致し居り
心付候事も色々有之候へ共御守殿ハ被下候人ニても有之候へハ極内々申

付夫ハ我等心付も申聞候へハ丸く行候へ共なまじむニ秋冬杯ハ申聞候へ
ハ毛を吹て疵を求候故其まゝ打過申候其中ニハもめも出來候半尤幾岡福
村杯ハよろしき人物之様子ニ候へハ定て何事も御守殿ニハまけて居り候
様指揮可致候へ共御中臈初ハ同じ御旗本の事故あまり御守殿の仕方不宜
候ハ、新御守殿へ歸り候てハ悪口も可致所さらニ別々の御人ニ候へは知
れも不致候へ共中以下ハ御つかね人故何事も双方へ相響き可申哉と被察
候兼て申通り被下人無之候へハめんどどう出來候ても我等ハ何事ニも不拘
捨置候外無之もめ出來不申内ニ兼て願候人被下候へは何事も不角立中々
我等方へ響き候故丸く双方を致候義も相成候へ共承知ニ通り万里の妨ニ
て不整様相成候へハ不及是非候右ハ千か一を認候て爲見申候我等不存事
ニハさぞ色々ノ事可有之是等の小事ハ大事ハ引出し候事ニ候△十日日門
主御出簾當中線御逢長女も來り小倉も來り申候日門主長女へハ何事か密
談も被成候よし天氣都合ニて何レも庭へ御出ニ相成り申候扱於嬉晴亭日

門主簾中線長女小倉出候席なく臺とかを出し夫ニ座し候よし御茶御菓子等上り色々の御咄し有之所へ小川セくく息をきり來り候故簾にて何事かを被存候へハ日門主の方ヲ袖にて覆ひ長女の前へ座し小サきかんどくりを出し是で一つと申候故簾中ニても驚き候處小川義日門主の方かけニ相成様ニいたし堅魚のさしミを出し候故さすがの長女もはつと致候様子ニ候へ共折角享主役にて左様致候ハ兼て當中か簾中の申付かも不知故よこ座ニ直し興ニ乘し候振ニとりなし小倉と兩人にて無已用候よし姉ニて云々申候故日門主ニても是ハよいくとまぎらかさて候て御ミしのよし左候と小川にて花の井を呼ひ自分と替り花の井へも右を吞せんと致候處花の井ハ流石不宜と存候半にかくしき顔をいたし候てさらニ手も出し不申そこくニ右品引セ候よしあまり小川義出來過候とて簾中咄申聞候口にてハ簾中も今日ハ日門主御出故精進にて食物かなき杯とからかひ候へ共の簾ハ日門主の叔母也本ニ出し候ハあまりと被申候○前々日門主御出の義ハ

御成同様位の處近頃ハ繼合とハ乍申老女杯にて右之如く同役へ相談もななく日門主并長女初を一人にてやりくり候處ニても此一人の權なる事知べし扱又日門主へハそバを指上長女初へハ皆々ハ卵めんを用候よし是ハ白と黄ばミ有之迄にて目立も不致候へハよろしく候へとも御菓子上り候處の御近くへ堅魚のさしミニ酒を出し候義余りと可申其上日門主ハ酒御好故かたく遠慮致し可然處誰へも小川相談なく花を咲セ可申とかゝる事致候義是ニても諸事一人にて致候事可知候

○過日能之節駒込へ行候人ハ辨當にて云々の義申聞候處其後礫未にて駒込を我等人四人計行候ニ手廻り不申候とてハ云々故やハリ礫にて致候と申出候よしにて辨當ニ不及との事故不持行乍然又如何か不相分と全くむすびニ香物とか極密用心ニハ持行候よし過日云々申聞候へ共云々相成候故此たん申聞候△御守殿様にてハ外ニ御慰も無之故日々ニもにぎしくごたく吞食致候義御好譬へハ一度ハ御守殿御亭主一度ハ新御守殿一

度ハ當中持と申様に何事も廻りニ相成り申候是ハ御祝義事ニても御庭ニても何ニても如此ニ候其等ハ至極よろしく候へハふりかへり見候へハ亭主ニ成とも客ニ成ても詰り入用ハ皆當主へかゝり申候瑛想院杯も先月廿四日著の上一覽いたし中ニ聞候よりも大そうニて中々武哀兩公の節もケ程の事ニハ無之日々氣の落つき候間無之早く國へ下り可申とて來る廿六七方ニも發足ニ可相成と申聞候今日ハ連枝主計頭下屋敷へ參り申候十七日ハ小梅邊へ行候よし十八日ハ暇乞ニ駒込へ來り申候よし同日ハ相摸民部やらも來り候筈廿一日ニハ一橋來り申候廿二三四頃礫へ歸り廿六七發と申事そうくしきニ驚入居り申候〇餘一事如何と分配いたし申候處當中ニても愛らしきと申かわひかり又御守殿ニても御側向ニてもかわいかり申候夫か如何と申セバ色々不分事をシャベリ申候故又ハ筆も不廻何事も出來不申不行義なるがかわいらしき様子皆我等ニて心配せる處が却て當り申候様子何ニもせよ御意ニ入候ハ當人の仕合ながらケ様事情の相違

するニハこまる之〇十二日御守殿御咄ニ八郎の事長女へ御咄しニ相成候へハ大ニ御尤なりとて我等認候花の井覺書迄則此龜紙へ持行上様へ入御聞今日表へ出候よし長女申上候とて御咄之ケ様の事ハ御直々申上候うへ表へ出御との御咄し之乍然愚考ニハやハリ不明□□へ一寸聞候上かと存候直ニ火中く

三月十四日認

一〇一 徳川齊昭書付藤田東湖宛

書附之品

藤田虎之介へ

七日の尸惡敷可相成と昨日出し申候扱又書中ニ對馬ニて四國のくらし云々と申義認候へ共チト分り兼申候故承り申候一昨日武田よりも申遣候半か花の井下りの義ニ付御守殿を奥御殿へ御文も有之奥御殿ニても下リニ不相成やう致度よし故挨拶ニもさしつかへ

徳川齊昭親書

二百三十九

候故先便何レ役人共へ申付よろしきよし申聞候ハ、私方にてハ花ニても筑ニても同じ家來の義何れニも可然云々申遣候へハ其心得にて御守殿御用人へかけ合候やうニと甚五へ可申聞候

一御守殿にてハ只今ハ御さびしく可被爲在候半か奥御殿并精宮も下向ニ相成候ハ、花の井一人居り不申候とも御さひしき事ハ有之間敷且又花の井義ハ先々代以前より登城等もいたし諸事相心得筑波義小川義ハ近頃ニ候へハ其花の井のみを御たのみ被成候て万一死候へハ跡のさしつかへニ相成候處其セツハ御守殿よりすけ候人ハ無之全ク一寸酒にてものみにきやか故にて右やうの思召ニ候へ共下り切と申ニも無之上ハ段々ニ跡やくとならし置候方都合も可然扱又筑と岡ハ勿論此方にてハ筑一人上ニ居り申候故自らわがまゝも出可申かたゞ交代にて可然やう存候事

一花の井事此地へハ下リニ相成候義を深く喜び申こし候よしニ候處察申

候に御守殿奥御殿へ向候てハ下リニ相成候を迷惑ニ申なし候半故彌花の井の爲と思召候て右やう被仰候事も難計候處是等は逢申候て花の井義も此方の家來故交代にて下り度由申候ハ、又少しハ御守殿にて御留被遊候義も相違可有之哉と存候何レ甚五等へ申合御守殿御用人の方并花の井へも申談可然候京地へ參り又下り太義とハ可申如何様表向大義ニハ候へ共表の者とちかひ自分入用ハ可有之候へ共皆此方にていたし候義にて京地へ登り候義さし留候よりハ却て登り度ハ内願ニ候半故昇降もお拙は實ニ難義とハ不存候何も便故申遣候事

一尙々我等も打ツ、き先ツよろしく安心可致候節法家ハつよく當世家ハ柔故側のやぶ流にて新法家をいたし申候處相應と存候之

一〇二 徳川齊昭書付

別紙昨日御繼嗣之義一覽致候やう申聞候處我等の主意ハ腹のよき家柄

筋目の者の子を立度と申義外ニ候へ共政府ニてハ長子ハ格別庶子ニて立候からハ人才を撰み云々と申候へ共尤の様ニハ候へ共見候人ニよりテ人物の善惡有之候へハ何レの子立候てもよき様ニ家柄筋目の者計妾ニいたし候へハ賢不肖ハいたし方無之候へ共外ニ子無之故家柄筋目の者ニて家督いたし候ニハ相違無之候處左候てハ上臈のミ多成候ニ指支申候如何いたし候て可然哉

一御繼嗣の中へも認候義有之候處家老ニてハさらにかまひ不申又兩上臈ニ孕せ見候へ共やはり此後のメリ合に云々と申達も無之空々と扣へ居候如何いたし候事か我等御繼嗣へ認候様ニ相成居候ハ、手を付度存候ても相成間敷候へ共前文ニ通りにて御繼嗣杯申事ニハさらニ心なき事と見え申候へ共是ハ後日の爲ニ成候故何レ動きなき所は認め後世へ殘し置度候ニ

一目付方ニて拔候七人の内人物誰々杯可然者か兼て承り居申度事

一〇三 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」

書附
之品

虎之介へ

人命ハいつ亡候と定り有る事に無之候へハ家督被仰付候即日ニ万一我等急死致候程も難計と存若もの義有之候節ハ讃岐守殿事ハ實兄大炊殿事ハ實弟ニ候故右之内ニて養子被致度其外遠縁ニハ候へ共大學番磨何れも此方の血脉者ニ候へハ不苦候へ共先ツ近き處を以養子にハ願候様ニと認手本のたんすニ入置候處鶴千代磨等追々出生致候てハ外々よりの養子迄ニハ至り申間敷候へとも又此後追々本腹ニも妾腹ニも出生有之候處万一鶴千代死去の節我等居候へハ申事も無之候へ共我等不幸致候てハ備前守事此家の柱石の者ニ候故万々の節の爲申聞置候故如左心得候て取扱可申候依て知レ候事ながら基本の處より趣意申聞候
一簾中を向へ候義ハ此家代々の血脉の不絶爲なり依りは簾中の腹より男

子出生致候へハ嫡子ニ可立ハ勿論之万一其嫡子不幸にて外ニ本腹の男子有らハ何番目より成とも取上げて嫡子とすへし乍去右ハ全く懐ニて嫡子存生の内ハやはり妾腹の子一同ニ年月の順に立居へし

一上臈ハ籬中腹に男子出生無之節の爲ニ立置事なれハ籬中の腹ニ嫡子ニ可立子なくは上臈の腹より出生の男子を嫡子ニ可立是も嫡子存生の内ハ同前年月の順ニ立居へし

一籬中ニも上臈ニも嫡子と可爲男子無之節ハ中臈の腹より出生致たる男子を嫡子ニ可立

上臈ハ籬中に男子出生無之節の扣ハ中臈ハ上臈ニも男子無之節の扣也
一右故ニ嫡子ノ子ニ男子出生迄ハ籬中の子ニ男子有之候ハ、兩人位は扣ニ可置本腹ニ兩人無之ハ上臈の子ニて扣置くへし上臈の子ニ無之ハ中臈の子ニて扣置くべし

一右故ニよき養子の口有之候とて嫡子に男子出生不致中ハミたりニ外々

へ籬中の子ヲ遣し申間敷養子の口有之候ハ、先ニもより候へ共先ツ中臈の子より遣候て夫より上臈の子夫より籬中の子と申様ニ懐ニて心得居可申候尤籬中の子ニ男子三四人も有之丈夫ニ候ハ、上臈の子ニても中臈の子ニても外々へ遣し不苦候尤尾紀連枝等へ遣候ハ籬中の子ニても上臈の子ニても不苦候へとも夫のミ此方の扣へなくは遣し申間敷候一籬中ニ男子無之女子有之上臈ニ男子有之候ハ、籬中の子なりとて右へ養子ハ致申間候^{敷脱カ}上臈ニ男子無之候ハ、中臈の腹より出生の男子を嫡子ニ致し可申候

一嫡子ニ相成候へハ別物庶子ニて有之候中ハ籬中の子も上臈の子も中臈の子も男子も女子も順ハ年月ニて兄弟姉妹を相定め扱ニ甲乙無之様可致候

一當時計ニハ無之此家の子々孫々迄籬中の子ヲ取捨氣に入候とて目掛の子ヲ嫡子ニいたし候事致間敷嫡子ニ立候義ハ女の氣ニ入候の氣ニ不入

のと申ニハ不拘腹の家柄格式の高下ニて定メ可申候又大名等へ遣候も其節の口次第ニハ候へ共先の家の高下も有之候故右の心得ニて遣し可申候

一 召遣候中臈何程美麗候とも輕き者の子ニ候事を承り候ハ、指止可申候此家の血脉ニかゝはり大切の義なり此方家中の娘程ハよき事ハなし若可然者なくハ外々ニても能々筋目を吟味してかゝへべし惡病有る者杯ハ以の外ニ是等ハ備前守の拘りニ義ニハ無之候得共目掛召抱等又ハ奥中の者ニても目掛ニ相成と申事承り候ハ、側用人等へ申聞其節々筋目の義をたゞさせ可申候

一 何程大名旗本の子ニても此方ニて中臈ニ使候ハ、その種ハよくとも其子ハ何方迄も中臈の子と見通し可申候

一 何程美麗ニて氣ニ入候女成とも公家大名高家の娘ニ無之候ハ、小上臈とハ致申間敷

一 簾中は君の事なれハ別物上臈ハ上臈中臈ハ中臈とへだて有之様可致候
一 上臈ハ追々御内證ニ相成候處善學院殿杯ハ 文公の思召ニて 公邊へ被仰立ニ上御方々上座ニ被遊候へとも 武公ニてハ惡敷と被仰御内證ハ御方々の跡へ付候右の思召ハ至極御尤候何程公家大名高家等の娘ニても一度上臈ニ相成候ては御内證にても臣也御方ニハ君なり君の上へ臣の立と申義けつして無之事にて以の外なれハ右様不相成候様可致候右ニ條々鎖細なる事の様にて至て大切ニ候へハ我等万一の後可頼ハ備後守ニ候故同様の書二枚認此方ニも指置候故右ニ義備後守さへ能々承知ニ候へハ泉客と相成候ても此御家へ對し安心いたし候事
一 簾中を向へ候ハ將軍家 親王攝家の内ニ致し可申候右ニ可向者無之候ハ、清家關東ニてハ尾紀加賀細川會津杯ニ候へとも尾紀の義ハ故障を生かちニ候へハ相成たけ不向様ニ懷ニて扱可申候
一 此方娘を遣候も將軍尾紀より大廣間詰大名の二十万石以上ニも候ハ、

遣し可申其外ハ尾紀連枝此方連枝ハ遣し候て不苦候

但し是も尾紀と尾紀連枝へハ相成たけ不遣様懷ニて扱可申候

右々外中山家山野邊家ハ勿論鈴木大田松平將監杯へ遣し候義ハよろしく候

一京都へハ以來一切遣し申間敷候

一岩船願入寺是亦遣し申間敷候

一鎌倉の義ハ能々の片輪ニて家中へも遣し兼候程ニ候ハ、無據遣し候と

も先ツハ遣し申間

(是等ノ處甚書取兼候故考ニて直し可申候)

男子の分ハ尾紀并ニ連枝へ遣候ても宜敷娘の義ハ右へ不遣と定候てハ

悪敷候へハ懷ニて不遣候様ニ扱候事

右ハ昨日銀次郎より遣し候内書落候故迎の事ニ此義も入可申候

一上臈ハ勿論中臈ニても出生有之候者ハ不調法の義有之候とも永の暇ニ

ハいたし不申押込申付候ハ宜敷候

右も何レへか可然處へ書加へ置可申候

一〇四 徳川齊昭書付〔藤田東湖宛〕

書附之品

藤田虎之介へ

一籬中ニも男子出生の様子無之上臈にも同斷の様子能見極候上ニて中臈の子ニ男子有之候ハ、嫡子ニ可致候

一籬中ニ嫡子計とか嫡子二男とか有之又上臈ニも男子有之中臈ニも男子有之上臈の子より中臈の子年増ニ候とも養子ニ遣候は中臈の子より遣候て万一本腹の男子無之節の爲ニハ上臈の子を立候様全ク懷ニて扱可申候又本腹ニ三四男も有之候へハ申事も無之候故上臈中臈の子ハ何レを先と申事も無之口次第ニ遣し可申候本腹の子ハ嫡子の子無之中ハ遣し候とも四男有之者ニ候ハ、四三二と申順ニ遣し可申候兎角本腹ニ男

子無之節ハ上臈の子嫡子ニ立候様ニ懐ニて扱可申候又中臈の中ニても其家柄ニより上臈ニも男子無之候ヘハ中臈の中ニて立候事も有之故先ツ家柄の悪敷者の子より養子ニ遣し可申候
一中臈ニ可抱ハ家中の家柄者の娘ニこへたる事ハなし若家中ニなくハ公家大名の部屋住の娘杯其家中の娘ニして出したるハ種之よけれハ宜敷候又ハ五百石以上の旗本の娘ニすへし但し何レも六悪病有之者ハ能々吟味すへし

五悪病ハ ライ カサ バカ 狂人 中氣 勞症

但シ右の内中氣勞病ハ先つゆるすべし

一此家中ニて娘を中臈ニ上ルハ一ニ目掛奉公といひて惡ミ嫌ふハ畢竟下々の心ニて下々ニて目かけといふハ一時の慰物の様ニ思ひて今日抱ても昨日ハ假ニする様なれハ其心得ニていひ又下々ニてハ娘を目かけ奉公ニ出して金儲をする様なれハ右様人ニ思ハれんと思ひて上ル事を迷

惑ニ存るなれ本よりいやしき町人杯と諸士と一ならさる事明白なれハ右様ニ思ふハ却て不心得なり君の家の事を深く不思故なり松平加州の沙汰を聞ニ老女より下々迄國人の娘なりといふめかけハ勿論なり其外越前會津杯もめかけハ家中家柄の者にて悪病無之者の娘をえらミて使といふ既ニ讃岐ニても同様なり其譯ハ此家ニては本腹ニも上臈ニも男子無之節の爲ニ手厚く扣へ置事ニて慰者といふニハあらさる故家柄悪病人物等を吟味する事なり第一めかけハ晝夜側近く居者故他國者ニてハ如何様事出来可申も難計又其外の者とても食事等へかゝる者も有レハ是亦難計其他何ニ不寄家中の者ニこへたる事ハなし家中の者ハ出ても入ても君と思へハ他所者とハ相違なりつかふニハ却て他所者ニて所々奉公杯したる者と此家中より出たる者とハ當座の働こそおとれとも行々至りてハ此家中の者ニこへたる事ハなき也されハ老女以下の者ハ如加賀家統て家中ニなしたき事なり右様なれハ非常の事ハ取のけ常ニ

側向の事を初他へ不聞してよきなり此家中ニても此家の事を深く思ひて如加賀家出ス様ニしたき事ニ

右ハ先日認候内の可然處へ書加可申候

一出生の有無ニ不拘小上臈ハ格式す、ミ候ても御内證迄ニて御方々より上へ立候義不宜事

一出生の有無ニ不拘御中臈ハ格式す、ミ候ても若年寄格迄の事但シ嫡子實母と成ても上使格迄の事

一本腹ニも男子無之

一小上臈ニも男子無之小臈ハ追て上使格御内證ニも成又ハ初より御内證の人も有之候へ共一くるめ小臈と認る

一中臈の腹より出生の男子嫡子ニ成候て其者ハ外中臈と違ひ追々取立ニ相成候へとも上使格迄ニて御内證とハいたし申間敷候事はハ近例武公御簾中御男子御出生無之御逝去御内證ニも御男子無之節 哀公御誕生被遊御嫡子ニ御立被遊候故御腹追々御取立ニ相成上使扱格ニ被遊候へ

とも御内證の先へハ御立不被遊 哀公御代ニ相成候ても同斷御實母の故を以先へ御立不被遊御格別の義なり

但し上使格なれハ常の上臈小上臈の上へハ立候て我等實母ハ御内證の義故上へ立候へとも万一此後小臈未上使格ニも不相成又御内證ニも不相成内ニ相□中臈御取立ニ相成候事も候ハ、小臈ハ御内證ニ引立候て何程實母ニても中臈ハ上使格ニ申付上臈の先へ不立様可致候尤上使格なれハ常の上臈小上臈の先へ立ハ勿論なり

右も同斷可然處へ書加可申候

一御中臈ハ家中にこえたる事ハ無之義前ニ申候通りなり扱又其娘何程氣ニ入候迎も氣ニ入候故を以て其親類縁者御取立又何程其娘ふしびニ成候とて其親類縁者ニ及候様御政體へ拘り候てハ以の外なり娘を中臈ニ抱へ候へハ最早もらひ切の事故娘の善惡ハ娘切親類縁者の善惡ハ娘へは不拘様可致事肝要ニ扱又右娘の親類縁者善惡共ニ此度ケ様ノ可申

付なれとも娘の爲ニ付ケ様申付候と人々可申歟とけんぎするも是亦有
ましくふつと不拘様可爲事なり

右も可然處へ書加へ可申候

一〇五 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」

書附返

虎之介へ

別紙一昨日も申遣候兩人の義追々承り申候ニ郷士等へ遣候ハ皆假宿又ハ
家來の娘分ニいたし候て遣し候よしニ候へハ右之あんばいニても此方ハ
不苦候大小は兎も角も生候子ハ何レ大名ニハ相成候へハ郷士等へ遣候程
の人ニ候も出し不申事も有之間敷候へハ尙又此だんも可申遣候
一遍身の義後遍も出來申候段ハ全鶉飼迄咄候がよろしく

尙々百金被下と申て當人の方へ五十取候ハ無理ニ有之候

披閱先日申聞候者も又はづれ云々ニ付てハ金をまし可然よし何も承り申
候毛利ニても好候よし是ハ出金多き故と存候へは此方ニても出金さえい
たし候へハ此方へ遣し候ハ無疑候我等覺申候て 源文殿ニて旗本の娘御
好の節ハ五百金ニて御抱ニ相成申候へハ何を申も先柄且遠路と申金故ニ
出し候事ニ候へハ其好の金五十ニてハ不出も尤ニ有之候せめて百ならハ
出し可申と花の井も申聞候且又中臈と申は京ニては定めてかろくいたし
候者と存候半ハ外ニ中臈と申ハ不存候へ共此方抔ニてハ自身針ニても取
候やうの事いたし候譯ニも無之候へハ百ツ、の義等吉へ申遣候て定り次
第金も先へ遣し候ハ、扱も可相成候社司ハ格別の美玉ニもなく候ハ、公
家の方可然美玉の義ハ子孫迄申傳へニハ相成兼候へハ何分公家の方相應
之者有之候ハ、公家の方可然候依別紙相返し此だん申遣候故明日又々可
申遣候序の義ハ何レ近く登候よしをも含ニ可申遣候

一〇六 徳川齊昭書付〔藤田東湖宛〕

御筆 學校祭神之議

一 先日學校の圖面認爲見申候處其節ハ

神を中へ祭り候處又一考致候へハ孔子ハ聖人とハ乍申何を申も異國の人にて魯の大夫にて有之候處聖人の事ニ候へハ唐ニても日本ニても學校とさへ申候へハ孔子を本尊ニ致し今にてハ孔子も好生の節と違ひ日本ニ候ハ、神とも可申程ニ候へ共前文申候通り異國ニ大夫ニ候へハ右のかはりニ本朝の神皇を祭り候様ニ相成候てハ孔子の名代を神皇ニて被遊候様ニて如何可有之哉左様申様ニ相成候てハ此方の了簡とハ相違ニてかへりて

神道ニ心有る者ハ惡口致し可申又儒道好の者は何とか評を付夫々惡口可申哉と二度考付候故申聞候

一 觀臺の義右ハ會津の義引候て申聞趣承り候右ハ圖へ觀臺と認候ハ初ハ

鐵砲矢場と弓矢場の先目當ニ致候處夫ニてハ鐵砲の目當ニ候のミニて天文臺ニ不相成弓鐵砲有之節ハ登り候事不相成候故弓矢場等を外へ移し候て觀臺と申目名を付候て天文臺と認可申を失念ニて其まゝ指置候故分り兼候義も尤ニ存候扱東天文臺西天文臺と二ツ出來候ハ見付の際ニて事有之節の爲をも含み認候事ニ有之候

十二月十五日

彪へ

一〇七 徳川齊昭書付〔藤田東湖宛〕

書附 之品

要石の歌

虎之介へ

行末も堅くそ契る要石動かぬ御世のためしと思へハ
但最初ハ

行末も堅くそ契虫□□も動かぬ御世を要と思へはして
 といたし候へ共あまり見識ニ過如何と端の如くニ直し候所如何可有之哉
 端の□□□一昨年も令世へも見セ小山田へも見セ相定申候處又昨日行末
 もものもしをといたし候方かと令世へ相談ニ遣し候處歌から俗のよし申
 聞候所左候て奥の方最初の通り可致哉相談の事は乍内々清軒へ□□□
 たんと令世への歌相談ハ時ニとりて申聞相違故見せ候ても申事尤と計ハ
 取かたく候依内々申聞候

一〇八 徳川齊昭書付(家老等宛)

書附
之品

家老
若年寄

是迄諸武藝ニ免印免許等有之候處學文計ハ右やうの義無之畢竟ハ是にて
 よろしきと申義ハなく身をおへ候迄學ひ可申品にて又學問ハ筆を取候て

の業計ニハ無之身の行へかゝり候品故やう様是にてよきと申義ハ定め兼
 候半カ何とか名目出來候てハ如何いたし候者か五經等講釋も無指支出來
 候者ハ〇〇其上ニ二十一史等見拔無指支者ハ〇〇と申如く其位名をこし
 らへ候てハ如何

一是迄諸武藝にてハ年數名計の免許も有之歟ニ候處是もなる程年來學ひ
 位付不申候ては師匠も氣之毒ニ存し無據事トハ存候へ共以來ハ弓鐵免
 印迄ハ數ニ入不申免印ハ弓ハ十万本の矢數鐵砲ハ一万發にて免許と相
 定可然鎗刀の義も十万も數かけ申候ハ、可然候ケ様いたし候てもやは
 り其人の生付又ハきやうふきやうにて上免下免許ハ可有之候へ共是ハ
 いたし方も無之やう被存候何レ只今の如くにては矢玉の數もかゝり不
 申鎗太刀も數かゝり不申候故學校も出來候迄ニハ何とか相止可然候水
 の義も下町稽古場ハ國井の渡し迄又ハ下へハ港まで海ハ祝町下ハ大貫
 迄とか相定候て免許ニいたし可然候尤是迄も水計は右ニ趣ハ有之候處

是迄の定ハ易すぎ申候やう被存候猶相談の上ニて可申聞候

八月廿八日

家老共

若年寄

側用人

尙々右之義ニ付候てハ先年虎之介へ咄候事も有之様覺え申候よく／＼
相談の上可申聞候

一學校人割の義未承候處定て調中とハ存候があまり延引不相成やう致度
候猶亦學校制度書等も同斷の事

一學校大手堀の義又々江戸へ可申遣候冬ニ至り候へハ甚手おくれニ相成候

一〇九 徳川齊昭書付

額字之義ハ樹木道額字の傳と申有之候處是迄傳も受不申我流ニて處々
へ遣候處餘り先より是非ニ不拘好候事故無已遣候へ共右ハ額字の傳受

候人へ可被 仰付候事

一額ハ高き所へかゝり候品ニ有之候へハ下官の我等認候品ニ無之候猶以
御本坊の御額認候事冥加ニハ候へ共恐多事ニて且習も無之我流ニて認
候てハ恐多候故御斷申上候事

一大學の義只認候事ハ乍惡敷も學道ニ候ハ、認指上可申候へ共家藏の品
寫候て指上候ても拙筆ニて寫候てハ更ニ似不申候故誰そ少々も右様の
事出來候人へ申付寫可指上事但し右の摺本ハ有之候へハ右を指上可申
哉の事拙者認上候義迷惑ニハ毛頭無之候へ共右の次第申上度事
御本坊御願ハ仙洞又ハ有栖川等へ御願且御頼被遊候方可然事

右の趣ニて可申遣候さりなから此方ニても額字ハ撰置候様善左衛門
と相談いたし置可申事

一一〇 徳川齊昭書付

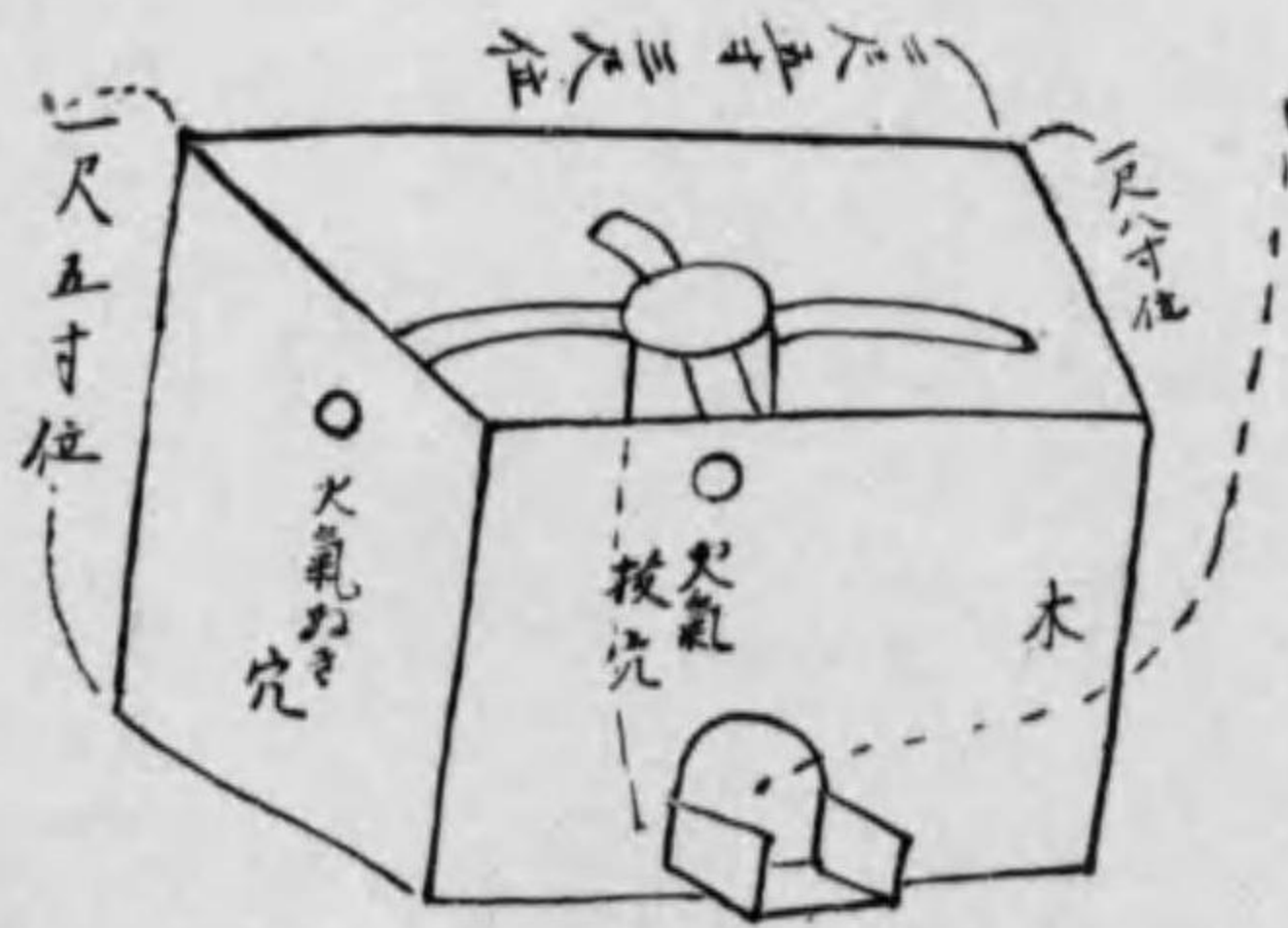
書附
之品

昨日猶湊船中ニては何より水ニさしつかへ候故諸人救の爲考も有之候ハ
、承り度由申聞候處昨日ハ便り日ニて歸城の上夜中迄書物ニ取かゝり考
を認候間無之候處一二愚考いたし候へとも心易く多く取過候は却て軍用
のため秘し置候方可然船乗共の命しのぎに相成候位の處可然と則今日拙
圖に認爲見申候拵候て飯ニてもたき試可申候末試ハ不致候へ共多分相違
ハ有之間敷と存候也

佐野勘兵衛



炭なれハ又外ニ考も有之候へ共入用と
り不申爲たき火ニて出来候様認申候





二白不殘銅にていたし候へハ又外ニよろしき義も候へ共夫ニては拵候入
用もかゝり可申と先ツ右やう認申候也

十一月廿日

船手頭

佐野勘兵衛へ

一一一 徳川齊昭書付〔金加役宛〕

書付之品

金加役共へ

一 此度ハ綠岡茶園下通り南之方へ蜜蜂指置左介と今一人同所ニ居り候者
ハ世話申付候故左大夫事も綠岡へ参り候節ニハ心を付候やう可相達候
一 茶製の外ニ蜜蜂の義申付候ニ付てハ左介等兩人の者へ蜜蜂一箱ニつき
一 朱とか又ハ其半分とか盆暮杯ニ遣し可申右様少々遣し候からにハ幾
箱ニふえ候とも右の割ニて被下有之候ハ、追々取ふやし候やう可相成
存候

一 日々一度ツ、箱の内をはき候やう可申付候
一 毎冬十月頃巢を切候處半より多くは切セ申間敷候勢悪敷箱へハ寒中餘
寒之節ハ日々蜜遣し候やう可申付候舊巢の方より切可申さハ昨年の巢を
當年切當年の巢を來年切候やう可致候
一 黒蜂ハ日々取セ可申是ハ瓦の中へ水を入置殺したる蜂を入候へハ草木
の肥ニもよろしく候黒蜂ふえ候へハ蜜蜂のがいニ相成候故日々ひねり

殺サセ可申候

一余の入用程ツ、蜂蜜貯候て餘ハ藥屋菓子屋へ拂ニいたし可申候江戸表ニも交物無之蜜甚少く製薬も上品ハ出来兼候此表ニは猶更上蜜無之候故何程もふやし申度候

一交物之義ハ一切いたし不申やう心得違候へハ益々相成候やうニと水飴等を交又ハ水を交杯いたし候へ共人命を救候一端ニて可申付候品切一故交物不致やう可申付候

一手袋もし張面又ハ候道具等ハ追々出来相渡し可申候

右之段金加役迄申聞候故長尾へも此旨可申聞候事

四月五日

金加役 共へ

二白蜜蜂の義ハ數年認申候處大將蜂二ツニ相成候へハ外の蜂數ハ少候ても是非分レ申候大將三ツ四ツ出候へハ其時ニ一箱の内ハ何度も分レ申候

處蜂數の少き箱ハ度々分れ候へハ本も分れ候蜂も寒中凌き兼皆死候故右様の箱ハ不分様いたし候か秘傳也

右傳ハ大將蜂の巢は如圖巢の下ニ別ニ下りて有之候故右巢を出来候節ニ二三度も切取候へハ大將蜂出来不申候故分レも不致勢惡敷箱も彌蜂數ふえ申候是一ツの秘傳也

一蜂の箱蟻付不申やう抗を水の中へ立候ハよろしく候へ共此水溜り大ク候へは風の節蜂を吹込多水入て死候故全ク蟻の不通迄の水よろし一冬向ハ箱をこもにてツ、ミ何分あたゝかにいたし可申候

又唐もろこしの花ハ蜜蜂好候物故茶園の廻りへ多く植サセ是ハ長尾又ハ左介等へ被下ニてよろしく候實ハ不用之

一一二 徳川齊昭書付〔安食七兵衛宛〕

安食七兵衛へ

十二月十七日夜認

寒中無障大悦存候當年ハ藏入甚少しく大凶之よし役人ハ申聞有之候處相場を承り申候へハ左程ニも無之左候へは藏入のミ大凶作ニて家中ニても拂候ニ左までの益も無之又入穀相濟候よし故百姓も益少きのミならず定て金收ニても申付られ候半其上毛見杯も何か手間とれ候よし故鳥獸の食に相成引立候程の救にも相成間敷と察申候此先相場も引上り候ハ、一万二万ハ常平倉の穀拂候がよろしく候我等へ承り候迄も無之相場次第ニて直に拂ニ扱可申乍然勝手の方ニて借候ニてハ一切出し申間敷候右ハ餓死ニも及候節か又ハ異船等の爲ニ貯置候の故中々容易ニ扶持方ニ指支候杯申位の事ニて出し候てハ不相成候故此だんも申置候事

尙々市川へも序の脱カセつ申合置べし猶來年來々年の厄年も眼前ニ有之候へハ拂候ハ格別只出し候てハ決して不相成候事

七兵衛へ

一一三 徳川齊昭書付

未十月

江戸御金方

一金七千貳百兩

是ハ文化十五寅二月ハ文政十二丑七月迄追々常輪へ御下ケ相成未御跡埋無之分

未八月

御役金方

一金四万六千三百拾壹兩

わけ 江戸御入用ニ爲指登ニ分
寛政七卯五月 三谷喜三郎へ
金七千兩 御渡金ニ由

文化元子十二月 御結納御用ニ由
金三千兩

徳川齊昭親書

同 三寅十月
金四千兩

大坂爲登金之由

同 四卯正月
金壹萬兩

公儀御積金之由

同 八未三月
金四千五百兩

御姫様方御上京御用之由五
千兩之内五百兩御下ヶ殘

同 十一戌十一月
金七千三百兩

御入輿御用之由

文化七申六月
金千四百兩

日光御豫參御用之由

同 十亥十一月
金貳千百拾壹兩

小石川兩御殿御燒失御用之由

同 十一子十一月
金七千兩

御普請爲御手當
公邊御積金之由

一金四万六千百三拾七兩

是ハ御勝手方御内用之
分江
水御入用中八行之
口々御返濟相立候
分差引

申正月

元 金 方

一金壹万千七百八十九兩貳分

是ハ御勝手方へ御懷物口
御貸出之處去ル卯年
無利足居置ニ相
成候分

一金貳千八百兩

是ハ中山備前守達を以年々
相除候御金口之處御勝手方へ御借入相
成候分

申正月

御國

御手元金

一金四千三百拾四兩貳朱

わけ

金千兩

是ハ御勝手方へ御貸出之處去ル卯年
無利足居置ニ相成候分

金千兩

徳川齊昭親書

右同斷 但金五拾兩宛利金心ニ御勝手方ニ爲指登之筈

金貳千三百拾四兩二朱

是ハ御勝手方へ御貸出し之處去ル卯ノ無利足居置ニ相成候分

一金六千兩貳分錢六百三拾七文

わけ

金千五百兩

是ハ御勝手方へ御貸出之處去ル卯ノ無利足居置ニ相成候分

金九百貳拾兩貳分錢六百三拾七文

是ハ亥九月中當坐御繰合ニ金千兩差出候内納有之殘金ニ分御延之

處今以御跡埋無之分

金五百兩

是ハ午十月御仕法を以町家爲御救御役金方へ御下ケ之分

金七百八拾兩

是ハ去ル申正月ノ金千三百兩御勝手方へ御貸出ニ相成候處去ル酉
ノ無利足二拾ケ年賦一ケ年金六拾五兩宛御返濟之筈

金八百兩

是ハ無利足ニ御勝手方へ御貸出相成去ル酉十二月中御跡埋之筈

今以御跡埋無之分

金五百兩

是ハ去ル卯十二月中御買穀御用ニ指出追テ御返濟之筈今以御跡埋

無之分

金千兩

是ハ無利足ニ御借入當申十一月中御返濟之筈

江戸

御手元金

一金五千兩 此分跡埋早々可致候

是ハ去ル卯七月中御勝手方申合壹万兩都合御積金ニ御指出之分追
亦御下ケニ相成候節ハ納候筈

一金四千八拾兩

是ハ去ル巳年嵐ニ付九村四町ハ五ケ年賦御貸出之内午年分千貳拾
兩返納之殘

但追々返納金之内

此分跡埋之處引 廻し承り申候 二千五百兩は御勝手方へ年賦御下ケ之筈

本文二千五百兩ハ去未年御收納糶相減於江府ハ拂米無之ニ付御下
ケ之義相願候分ニ亦右跡埋之義も五千兩之口と一同ニ申上ニ相成
候儀と奉存候乍恐下ケ札ニ亦奉申上候

御國

御藏方

午四月書上

一糶六万千百八拾三俵

わけ

糶三万千六百九拾九俵

是ハ享和二戌年糶壹万五千俵

公儀御上納金御手當御下ケ

文化二丑年糶七千俵御勝手御難澁ニ付御下ケ同三寅年糶壹万五千

俵右同斷御下ケ

文政四巳年糶壹万俵厚姫様御婚姻御入用御手當御下ケ

都合糶四万七千俵御下ケ之内ハ追々御跡埋ニ相成去巳諸返納糶百

四俵御跡埋ニ罷成候殘

糶貳万六千俵

是ハ文政四巳年早損ニ付同五午年糶壹万俵當坐御下ケ之内四千俵

御跡埋殘并同六未年御收納相減候付粃貳万俵御下ケ之分同七申年
方十一ケ年ニ御跡埋ニ罷成筈ニ御座候處去已迄御年延ニ罷成申
候

粃三千四百八拾四俵

是ハ去ル酉戌御收納相成御扶持渡等ニ當座御繰合ニ罷成り候分御
國御扶持渡殘等に追々御跡埋ニ罷成殘候去々辰年御勘定奉行中御
買上粃千貳百五拾九俵御跡埋ニ罷成候殘

未四月書上

一粃四千六百八拾五俵 御手元御貯口

是ハ去ル辰年御收納相減御扶持渡方御不足ニ罷成候付去々巳八月
中御達之上粃六千貳百七拾壹俵常輪御入用之方ハ當座御下ケニ罷
成御跡埋之儀ハ去ル巳春中地方物成取候族へ玄米御貸出相成候返
納粃を以御跡埋ニ取扱可申分去午粃千五百八拾六俵返納殘ニ御座

候

江戸

御藏方

一米四千俵

是ハ去ル寅年中小梅御懷物之内御下ケ之分
已方當未迄御年延相濟候分

金拾三万三千六百三拾貳兩貳朱

錢六百三拾七文

粃六万五千八百六拾八俵

米四千俵

右之通ニ御座候以上

德川齊昭親書
申正月

二百七十八

三年保
齊昭親諭原案
東湖批削

第二 天保三年 齊昭親諭原案

東湖批削

一 我等愚昧にて 人民の上 九五之位 立 に在 立 へき者にあらねと 不幸にして先君を喪し 天命をうけて 小國なからも 小國なからも
 一國を領る身と成ては天道ニ違ふ事なく事有ん時ハ万分か一も將軍家への御恩を報度存なれハ各も左様心得可申候人々形こそ生れ付たる事なれ
 心ハ愚なるより賢きにもうつさハうつるへし顔淵も舜何人也予何人も有
 爲者亦若是といひ孟子も堯舜與人同耳といへるハ宜なりされハ某ハ古の
 明君賢將をしたひ各ハ古の忠信義士 臣カ を學ひ 共ニ 在世ニハ共ニ他國の手本
 にも成り後代には能ためしにもひかれ父母の名迄も顯す様にと眞實ニ心
 掛可申候縦 君臣 ひ我等計左様存候ても各其心得無之候而ハ善政ハ行ハれざる
 事に候兎角 君臣 善政ハ上下一 致 和して行ふ心ニあらされハ善政ハ行届さる 命と道を受忠を天朝 善なり
 故ニ 間 某と共に一 イキ 和して國家を能々治め固めて 萬一 事有ん時は 命と道を受忠を天朝 恐多も

齊昭親諭原案 (天保三年)

にし數千年通明闇の德澤德二百年來涵養の恩を

度

イキ

東照神君より今日迄の御恩を報可申様ニ人々心掛可申事に候太平なれハ

生ながら飽までに食ひ煖かに著て今日迄枕を高く安樂ニ暮候ハ誰か恩ニ有へき哉誰か惠に可有哉能々此所を辨へ一日たりともいたつらニ日を不送様ニ存候

東湖朱批

九五ハ人君の御位ニ亦乍恐上公の御儀をも御國中にてハ九五と奉唱候者も御坐候へ共全ク御國中の儀實ハ九五と申候へハ

天皇の御事ニ罷成可申哉と奉存候尤天下へ押出し候時ハ九五ハ天皇ニ相成一國にてハ一國の人君の事ニ相成候儀ハ勿論ニ有之此御文儀ハ全ク御國中へ御對し被遊候御儀ゆへ御子細ハ有御坐間敷候へ共同しくハ嫌疑を御避被遊人民の上に立へき者抔と被遊候ハ如何可有御坐哉天命も右同斷と奉存候不幸にして先君を喪し抔と被遊候ハ如何可有御坐哉

朋友へ拘り候御文義にハ和の字よろしく君臣へ拘り候節ハ致の字よろ

しき様にも奉存候

神君神祖抔世俗之通言に罷成居候へ共同しくハ 東照宮又ハ 東照公

と被遊候方正しき様奉存候

三

人ハ何事にも信なくてハ不叶事之民無信不立又或書ニ信ハ行之基也行者人之本也人非行無以成行非信無以立學問之義も誠信なきハ無用也一言一句にても今日身の上ハ引請て信實ニ修行致してこそ眞の學問に候へ誠なき學問ハ只詩文ニても達者ニいたし又ハ辨舌にまかせて時之政事を誹謗いたし或ハ人を誹謗し己れの勝手なる方へ理を付引事等して己のミ事知り顔に誇る様ニ成より終にハ學問の力をたのミて放蕩のたすけとなり行てハ一向ニ學問ハいたし不申候とも正直ニ父母を申付り候事を守る者にハはるかにおとるへし其職ニあらずふところの事も知らず一朝一己了簡して政事を誹謗し人を誹謗せずして友于兄弟施於有政の所を行度事なり口にてハ何事も勝手次第ニいはるゝ者にて口ハ禍を出の門耳ハ幸を入る

門なれハ多聞て善と思は、口ニいださすとも其身に行ひて善を積ハ自ら上ニ得られぬ事ハ有間敷也

此御ケ條

御相續己來御實地の上にて御試み被遊候處を以て被 仰出候御儀と奉 察候間何等申上兼候へ共万一此御文面のまゝに被 仰出候ハ、乍恐 御徳義にも相拘り一國ハ勿論他國にても拜見仕候人々失望可然哉と甚 恐懼仕候乍恐却る是に引違へ御文儀御目論被遊候様仕度不堪^{不堪}願至願候

三

何事を學ふとも年月を頼ます學んと心ざ、ハ速ニ初むへし一年も若き時より初一日も早く初めたるハ得也成就したりと思ふハ一年も遅きか手あつき也自得したりと思ふ時ハ口計功者ニ成て夫より先へは往かぬ物也扱何事を學ふも譬ていは、人と、もに道を行に先の人をこえんと思ひつ、あゆみ其人をこえて、又先の人をこえんと思ひ目當してあゆむ時ハ自ら精出る者也勤向繁多家事繁多なりと、一々數え立ていへハひまなきか如く

なれとも己の好む事する間ハ有ものなれハ好ミさへすれハ何事にてても大方ハ出来ぬといふ事ハ有間敷なり壯年の節ハ氣力もよき事なれハ壯年ニ學ひたる事ニあらされハ自得する事ハ不能者なれハ壯年の時に艱難辛苦して學ふ時ハ老後に必安逸にハなる事なり何程才氣有りても生れのまゝにて學問せされハ古今ニくらき故よき了簡分別も出ぬ者にて何程勇力ありても習ぬ武藝ハ出来ぬ者也されは南蠻鐵も數度の鍛を得て名刃の名を得白玉も磨瑳の數を経て夜光の名ハ得る事なれハ生のまゝにさしおかす文武共ニ壯年の者ハ猶更精を出すへき事なり

四

愚なる者にてても人の過を責るハ明にて聰明成者にてても己を恕するにハ暗く成者なれハ人の不正を正す心にて己の身を責て不正之筋無之様改め可申也又己を責て正しくするとて人を責る事の甚しきハ朋友よりうとまれそしりを受る事あるもの也孔子も人而不仁疾之甚亂也といへり何程其身正しきとて上ニハ得られぬ事なり人によりては君へさへ能奉公すれハ

朋友

親類朋友のなかハ如何様にててもかまはぬといふ者有は誤り也親類ハ申ニ
不及。家中互睦しくするハ。則君への一ツの奉公也。己の勤をするのミ奉公と
思ふましく候

五

朝夕食する毎に粒々民の辛苦にて畢竟人々祖先の勤勞等により粒々先君
より賜りたる所なれハ朝夕食る度ニ此所を不忘食ニ向ひてハ一拜して
箸を取べし然るニ右様の所も忘れ儉約をも忘れ佳肴なけれハ食ハれぬ
杯いふ様の事に成より豊年ハ勝手ニならぬ杯いふ者有ハ何とも聞えぬ事
なり若凶年有て君より扶持賜ハらすハ誰か扶持いたし可申哉金銀珠玉ハ
飢て食ふべからすされハ疎略に不思よく心付べし飽煖ハ淫欲を生し
飢寒ハ善心を發といへり衣食にのミかきる事ニあらず以約失之者鮮矣と
いふ聖語を服膺して何事も奢心を去り本を考て粒々民の辛苦なる事を思
ふべし

此御ケ條無所殘奉存候

六

上を賜り候米穀其時々一拜仕候而箸を取可申儀乍恐御尤の 思召ニ被
爲在既ニ謹厚の人にハ右様仕來候者も御坐候へ共浮薄の人情不殘右様
一拜仕候儀ハ安心不仕却而御意をあざけり候類も安心不仕候間まづ一
拜の所ハ御除キ被遊食すること此所を不忘様ニ心懸べし杯と被遊候
而ハ如何可有之哉又按するニ一拜して箸を取も可然程の事ハ杯と被遊
候而も可然哉

己の身をハ能おさめて扱立身せん事をハねかふ間敷候然ニケ様に身をお
さめたるにいかてか立身せさらんと君をうらみ人をうらむ事なかれ己ハ
能おさまりたると思ひても立身せざるハおさまらざる所有か故也と思ひ
て慎むべき也夫々の役人といふもあり外にも人目多けれハ能おさまりた
ると未成とハ自ら一々知る事也又人の立身したるをそねミ妬杯といふハ
勿論士ニ有間敷事なり立身したる人をうらやむハ人情なれハ立身したる
をうらやまんよりハ其人の善行をうらやみて行のひとしからん事を可思

乍恐此二三
行人心奉存
候間御除被
遊候方穩ニ
可有御坐哉

なり

〔朋友〕七 世評を聞て善惡共ニねんころにつくる者ハ親師と同様なれハ忝可思なり
 善き事ハ其人に向ひて申よき物なれば他人にてもいひ聞する物なれと惡
 き事ハ申惡きものなれハねんころ成親類にあらざれば不申事なりされは
 聞者もいさゝか立腹赤面いたさすよろこひて眞實に取受へし又朋友の善
 惡ハ此方より眞實に人の不知様に其者へのミ異見すべしたとひ常々親友
 ニあらされハとて其人へハ不告して人とゝもに朋友の惡事をいひて樂む
 杯ハ我家中にハ有ぬ行也家中ハ互ニ一和して睦く交るこそ愚昧か九五ニ
在於在ても忝存所なり他所者杯ハ好事者か又ハ酒食にても與るときハ兄弟の
 如く親友の如く多く集來れとも患難有る時ハ來る者希にて頼少なしさり
 とて此方にて誠信をは失間敷候此方に而信を以交り候へハ他所人に而も
 誠を以交る事にてまして家中の義は生るゝより死る迄朋友の事なれハ別
 る誠信を不取失睦しく交へき筈の事也

此御ケ條乍
 恐奉敬服候
 御國の弊風
 中にハ誠ニ
 と奉存候
 御國の弊風
 中にハ誠ニ
 と奉存候

〔朋友〕九

〔朋友〕八 朋友の絶交は教戒ニもならず只々家中の中惡敷成のミなり其者惡敷事有
 ハ主君より夫々各申儀なれハ私ニ絶交するニハ不及義也同役などの絶交
 ハ互ニ不行届所より起事なれば此所能々心得絶交なき様ニ致度事なり
 親類ハ勿論同役ニても過有之各受候ハ當人は勿論同役ニ不念也又善事有
 之賞美あるは當人并親類ハ勿論同役迄の手柄なれハ誰何役ニかきらす親類
 同役の儀ハ別而心を付互に睦く善惡しせ合可申候新規ニ同役ニ成候もの
 杯へハ何事も無伏藏申聞指支無之様ニ勤易き様にすべし古役なりとて權
 を取新役の者をなぶり又ハ新役の者ニ費をかけて樂ミ或ハ勤向委細ニ不
 傳して其者ニ不働をさせて笑ふ杯ハ其者の差支のミならず主君の用も不
 便事也ケ様ニいやしくきたなき心はたとひ主君よりハ少事成とて先ツ其
 まニ見すめ置候とも能々考へなは獨り心に耻さらんや慎むへき事也
 家中ハ誰となく互ニ睦く打解てつき合可申候乍去あまり心易立の出來ぬ
 様ニ致度事に候心易立の過て譬へは袴も羽織も取棄安坐杯にて飲食した

以下四ケ條
 何れも乍恐

〔十〕

御尤之御次
御被取除在
御無御坐除
御存候へ共
御論家中へ
御細ハチ遊
御申カト奉
存候

朋友

酒之事

但此小事大
何れ御論ハ
遊候様愚慮
仕候

不行義を心易きと存違候時ハ終にハ裸程ニもいたり其上ニハ口論等起
りてはてハ中惡敷成候類ハ大方心易立の過る所より起り候も不少承及候へハ不行跡なる事いてきて中
惡敷なるものなれハ不行跡なく打解て互ニ心易いたし候様ニ心掛可申候
酒ハ人の家へ往てハ深く不用様ニ心掛可申候他所へ出てハ勿論に候扱又
人ニ過有之候ハ異見申度義有之候とも酒之席ニてハ申間敷候明日ニなり
人の不居時に可申事に候品ニより惡敷聞取候時ハ異見か却る仇にもなり
又ハ高聲にて爭論の如く成候ときハ是も非も分ち難く成事酒の上ニてハ
不少様存候又立腹いたし候事有之候とも酒の場にてハ勿論立腹の様子見
えぬ様ニ可致候殊ニ寄候ハ酒の上の惡敷様に聞え申候へハ酒の席にて
ハいさゝかいきとほり不申一日二日も過候ハ能々考候上ニ可申候何事
も後悔の生候ハ初の踈忽なる所より生候事ニハ大難の生るハ細微なる所
より發候へハ一寸いたし候事にては踈略に不存又大事に成候迎も不驚様
常々心得可申事

除 十二

酒席の長坐若者の夜はなし後悔なき様ニ心掛可申候

除 十三

酒を吞ハ醉者色ニハ迷者狐狸は化す者と心得なから酒ニ酔色ニ迷狐狸ニ
化さるゝ者皆此方より手出をする故也此方さへ正敷候ハ、狐狸も化す事
不能されハ朋友ニ如何様なる人有之とも此方さへ信の道を以て正しく交候
ハ、何の危事か有べき

頭支配 十四

支配の人ハ君の人に候へハ大切ニ存世話いたし惡敷事有之候ハ、我等よ
り答不申付中ニ答の無之様ニ申さとし候様支配頭職の者ハ心得可申候支
配頭ハ我等より人物撰ひ候て申付候事に候へハ何事も支配頭の指圖ハ我
等の指圖に候へは支配たる者ハ彼是趣意不申立頭の指圖守り可申候事定
置所の法度又ハ父母親類の惡敷と申を守ハ勿論に候夫迄にも無之大抵の人ハ
是ハ善是ハ惡と申義分ればこそ惡敷と存候事ハ忍ひ隠れて致す事に候へ
ハ一向ニ善惡の不分と申には無之候されハ己の惡敷と存候事不致程の人
に候へハ人より惡敷と被申候時ハ心付て惡事ハ不致候故自ら惡事ハ少く

此御ケ條午
恐甚突當り
にも可相成
哉と恐懼仕
候

本文定置所
の法度云云
よりハ別の
御ケ條ニ罷
成候方よろ
しき様愚慮
候仕

可成儀に候「惡事有之咎」に成候も大方ハ己も惡敷と心付人より心を付られ候事も知ツ、いたし候なれハ求て致候同様の儀に候「又我過を朋友の者來りてねもころに告なは其人の宅へ禮ニ往べし念頃につくる人ニ左様の事ハ無之杯いふ時ハ告たる人却て迷惑ニ成以後過有之ても告る人無之様ニなる時ハ自ら損を招といふ者也いかなる所にて誰ニケ様の事したりといふ相手の名迄も又異見いひたりし事も異見を用ひしも用ひさりしも日々の事其職ありて我等か方知るゝ事なれハ己れ惡敷と心付たる儀は不致若致候後ニ心付たらは頭并親類朋友より沙汰の無之中ニ自ら改めて以後無之様に心得べし内々の巧み少々の惡事ハ朋友にも主君にもしれまし行ひ又少々の善事ハ無益也とて行ハざるハ誠ニあましましと思ひてしのひかくれて惡敷事ハすましましきやかくれたるより顯るゝハな事ならずや身をおさめつゝしむものハ又其如く聞ゆるものなれハゆめゆめいづはりなく誠信を本として行ひ内省不疾の聖語服膺可致事

本文瑣細の事も日々其職ありて 上の御聽ニ達候御儀ゆへ云々との御

儀乍恐御尤之御儀にハ御坐候へ共御文面にハ御あらハし不被遊候方却亦人心へ響キ合可申奉存候申上候迄も無之候得共人君の威ハ古人も雷霆ニたとへ候處一體雷霆の威ハ測りがたく人君の威も測りがたくいつ何時如何様の儀被 仰付候も知れ不申候ゆへ人民畏服仕居候儀と奉存候然るニ雷神ハ世間の人の惡事をハ一々承知いたし居候と相成候へハ萬々一間違ひ一人の惡人のがれ候へハ其後ハ人々雷神をおそれ不申様ニ相成可申奉存候當時の御政事善惡とも一々上達仕候儀ハ勿論と奉存候へ共委細ニ御承知被遊候と御意被遊々も却亦かくれたる事あらハるゝハなし杯と御含み被遊候方人臣の身にてハ畏服仕り其上内省不疾の確言をも御引被遊候上ハ旁日々其職ありての事ハ御除キ被遊候亦ハ如何可有之哉右ハ寅の春中文武ハ武士の大道云々難有御筆之趣被仰出候時わるがしき者の評議承り及候儀今以殘念ニ存候ゆへ任心付申上事

十五 銀寡を不侮して重頭の義無之様ニいたし身分相應にめくミ可申候況兩年

寄を初重職の者ニハ不敬無之様心得可申候不禮なる義有之候へハ其者への不敬よりハ役へ對して不敬ニ相成其儘ニ指置かたく候故此所心得可申候

除キ 十六

文武共に指南いたし候者すくれて達者にさへ候ハ、門人に可成候其人の行に悪き事候とも悪き事さへ眞似いたさす候ハ、苦かるましく候文武共ニ人なミよりすくれ候者に一くせ無之者は脱アルカに候又無學無能の人に候とも行宜候ハ、無學無能を惡み謗誹いたさすして其人のよき行をまねいたし可申候學文したる者は其身行ハ惡敷候ても聖賢の口まねするゆへ己の身ニかゝはらぬ事にハ尤の理申者に候又無學の人にても定法を堅固ニ守り身の行ハよく候へ共無學問故ニ辯舌不達者ニある人の笑になる事も有之ものに候へとも無學成と不申堅固ニ定法を守り候處を手本と可致候又學者の行惡敷とてすて不申多識の所を手本ニいたし可申候

除 十七

人々己れの持前の義ニはくはしくして人の持前の世話するにハ不及事也

又 何役にても誰にても其身の程々を知て備は有べき也

此備と被仰候ハ何を御指被遊候哉恐察仕兼候

樂事 十八

樂ミといふも人ニなくて不叶事也其内ニ文武杯好て樂ミと思ふ者は格別の事なれハ是は誰れにてもなさすして不叶なるニ夫を樂ミと思ふハ生付ての一得なり此所にて文武といふハ學文するより詩歌諸體等に至るまでいふ武といふハ武道のたしなみより刀劍の目利等ニ至る迄をさして一まとめに武といふ又其外ニも萬の樂事ハあれとも主君より不禁程の事ならば文武の備ある上ハ人々の程々を考へて養生に成樂ミハすへき也只に樂ミにのミ長して己か務を怠るさるやうにすべし己れの程々を考へ足る事を知る時は貧賤にても相應の樂ミハ有へし足事を不知時ハ富貴ニても足行とは不思也何に不寄よき物を得ては身を飾度思ふは人情にてあしからされとも身分相應にて足といふ事を不知時は身を飾らんか爲に大切の身まで亡す事なり身を亡ては財寶ありても何の益ぞ

朋友 十九

いさゝかの事にても誠信は不被失様ニ心掛申へく候朋友などの約束事は

此御條御
明倫御
意奉存候
乍去人君
臣下御論
ハ遊候に
ハ可御坐
敷有御候
萬一此通
被仰出候
ハ存候と
奉再慮被
御候様不
至願候堪

廿

輕々しくうけあひ申間敷候坐まかせにうけ合者といふハ信實のなき者と存に候一才いたし候事にても前後を考へ約束事ハいたし可申候約束いたし候ハ、變かへし不申様心得可申候朋友にても他人よりニても先より曲りたる事を申かけ候とも此方にてハ直を以應し候へハ自ら怨を受事は有間敷候先より曲を申候に應して此方よりも曲を以應し候へハ猶々逆候事に候其君柔弱にして紀綱弛む時ハ役人へ賄賂し或は近臣又ハ奥向へ諂ひ又ハ主君の好尚に従ひて公然として讒諂面諛を以て其君に得られん事を願ひ其君剛強にして紀綱張るときハ剛直を表とし頭分又ハ重職のものへも不敬無禮をなし其君發明にして衆人の諫を用る時ハ直言を述るを表として大臣をいひふせはてハ主君をも己か辨にていひふせ何事も己の思ふ所へ落すを忠成といひ是を以其君ニ得られん事を願ふ者有りする所こそ同しからねど諂諛のにくむへきに至りてハともに穿窬の盜にて誠信の心なきか故ニいつにても立身ハならぬ事とするべし甚き時ハ身の禍となる事

此御條御
廿一
仰出候多
ろしく可
御坐候又
し可御惡
坐疑惑仕
兼候等申
上

朋友

廿二

なり
朋友の美事有ハ他人へも咄し上へとくくる様にもすへし又朋友の惡事有るハ人ニかくして上へ知れざる中に改る様にすへしいさゝかたりとも朋友の惡事をいふへき職にもあらずして訴出る事なかれ尤叛逆等の重き儀ハ格別也
同し役に久敷有を不本意と思間敷候其者其役ニ相當なる故ニ久敷指置事に候格式等進ミて其役ニ有ハ猶々本意と可思候提頭何事ニ不寄信誠を守り候事第一に候譬へは困窮ニ亦忠孝つくし度存候事存る如くならぬとて神佛をいのり候にも誠の心無之ては神佛も受納致間敷誠の心さへ有之候ハ、君より惠ミ有へき也然るにかく迄忠孝をつくしてハ主君より沙汰のなき筈ハなしと主君世ををうらむ間敷候夫ハ未誠の心薄故と可思候誠心厚くして人々しる程に忠孝つくし候ハ、いのらすとて神佛ハ受納いたし可申候たとひ神佛ハ受納いたし不申候とも第一我等其儘ニは棄置間敷候故

いかにも誠をつくし候様可致候

除キ 二三

音信贈答互ニ成たけ手輕にいたし申義は兼而達候通り可守候役人の路等遣候義ハ勿論たとひ是迄ハ親友たりとも役人に成候ハ、少しく嫌を避る方なるへし朋友の内ニ亦も報を求ん爲ニ先ツ施恩候ハ路遣候同様の義ニ有之候へハ致間敷人に施恩候てハ報を求めざる様に心掛可申候

除キ 廿四

何事ニ不寄人々家を忘れぬ様にすへし部屋住にて家を忘れ父母妻子を忘るゝ時ハ其家を亡ス行の出來者也家を大切と思ふ時は自ら勤も大切ニ成事なり軍に出敵と戦ニハ身をは忘るへし家をハ忘るへからず家を思ハ、死へき場にて死へし主君其家を棄置事ニあらすたとひ身は全すとも不義あらはいかてか主君其家を只に指置へきや能々此理を心得て家を大切に思ふべし

廿五

事なき時ハ才學有者は勿論誰ニも尤らしき口を聞者に候へとも扱其人を用ひ候へハ外見に而口を聞たる様にハまいらす又靜なる時ハ尤強なる事

申候人も難に臨み候てハ其場をはつしまぬかれんとするハ本より小才有りて信實なき輕薄者にて士ニ有間敷事に候人々職外の事には不拘主君より申付り候持前を守りて持前の事ニ付ては難事出來候ともまぬかれん事を願ハざる様にすべし

廿六
此御ケ條實ニ公大に御國のいぢけ候風俗へハ別多的中可仕哉と奉存候

廿七

何稽古ニても我より先へ初たる者ならば子供にも問へし聽事を秘るハ損也又我より後に初めたる人をハ能世話をして引立様ニすべし家中ニ藝能達したる者多く出來ハ、主君の爲なりしかるに同流ニても他流ニても何事ニても上手の者を妬ミ杯するハ、主君へ對して不忠成事也。君父過あらは、心をつくして言上上書等して諫むへし。然を威光ニおそれて、告る事ハせず。かげにては、人とゝもニ君父の惡をい立て、誹謗するハ、不忠不孝の至也。君父の美事は人へも咄し何方迄も聞ゆる様にと思ひ惡は人へかくして告るこそ誠の忠孝といふへけれ然るを又諫言立して其事を人にも言聞せ己か功にはほこるハ君父の惡を顯す也されハ君父の德をあらハすも

臣子けかすも亦臣子也況や父君の前にてハ諂ひて陰にては舌を延て毀るハ二心有者にて士ニハ有間敷也

廿八 君を諫るといふハなしかたき事なれハ諫をいふハ良臣にあらされは不能事なり乍去己才學有と思ひ君を諫をいふニ伐りて主君の心ニ逆て故障に成ニもかまひなく何事も己か申様ニせんとするハ却て君をなひかしろにするに中るなり惡不孫以爲勇者惡訐以爲直者といへり一二度言上上書して取用ひにならずハ故障有故と思ふへし或ハ己の理の惡敷に不心付過て諫むるも有べし又諫むるといふを伐る者にはもはや事の成たるを不知顔にて上書等して己か諫を用られたる様ニもてなす抔ハいといやしき心なり能々心すへき事也

此御ケ條臣下の中間にて相互ひ心を付候歟又ハ師を弟子を教誨仕候にハ誠ニ的當の御主意文義に御坐候へ共乍恐 上の御意と罷成候へハ甚御徳義ニ拘り候儀と奉存候同し名言にても時處位の相違も可有御坐哉却

本文と御引違ひ公明正大の御美德あられ候様なる御教諭ニ被遊候也ハ如何可有御坐哉

廿九 此御ケ條右同斷と奉存候

上書といふハ下の事上へ通る間敷かと疑ひのなき爲ニ人々心付たる事ハ誰より成とも上書さする事にて上書ハ君の心を付る迄の事にて候役々有りて扱事に候へハ何事も上書ニさへすれば其通りニ成と計ハ思ふ間敷何役ニても其職ニ成候へハ色々故障の筋有りて一方ニよき理有之可爲と存候へハ一方ニ惡敷事有之様にて外にて見候様にハ不成事に候へハ此所心得て上書ハ致し可申事にて候

文武の事

卅 武道を心掛候とて長刀抔帯し異形に見え候者ハ人見せのはやり者にて心有者よりハ却未練の士と可被申候何程長刀にても鎗鎗の如く長き刀も不被指者に候嗜ハしかたよりハ心ニ有之儀と存候短き者にて勝こそ常々の修行と存候されハ平輪の義ハ人並にて異形ニ不見様にし心に嗜有之度事に候學者劔術つかひ徘徊師抔と形にて人に知られぬ様ニ可致候

此ヶ條逐一御確論

卅二

武藝の義は弓炮鎗長刀柄太刀等にて便利の宜物にて一藝は能達候様致
 度事に候乍去一藝にのミ達候へハ他の事ハ不學してよきと申候てハ譬へ
 ハ弓のミニ達候ても弓なき故鐵炮ハ有ても打事ならぬといひ鎗なき故柄
 太刀ハ有てもならぬといふ様にてハ甚不便利なり初より覺悟して出る時
 ハ己れの得道具持出る事なれハわけもなければ火急の節に間に合ぬ事な
 れハ一藝に達したる上は何にても用ニ可立義にハ立入て置そ宜しきなり
 此御ヶ條乍恐御尤にハ被爲在候へ共御國の風俗御承知も被爲遊候通り
 近來武藝も名聞に走り十人ニ八人迄ハ數流稽古仕り甚しきに至候ハ
 十余流免許杯と申候ハ流儀數の多キニ誇り候弊風に御坐候夫ゆへ近來
 上手ハ少く罷成候儀と奉存候仍ハ御本文之趣乍恐猿之木ニ昇る事を
 教候と歎申候おそれなきにしもあらず苦心仕候
 人の短を毀らす己の長に伐らす人の美事ハ稱し惡事ハ異見し思ハ報ゆへ
 し怨ハ忍べし扱人に得手不得手有りて是に長したる者有彼に短くら彼に

明なる

長したる者は是にくらき者なれハ己の長したる事ハ己は易き事の様ニ思
 へと不長者ハ難きと思ふ事なれば己れ長したりとて人の不長を責む間敷
 候己れ才學有とて人を見下し慢る者は才學有人にあらず己れ才學有とて
 朋友等の異見を拒者ハ才智有人にあらず舜の大智すら人に取て善をする
 事を樂そかし己レ不心付儀ハ誰にても有之者に候へハ人の過を見てハ異
 見し己の過を告る人有れハよろこひて改るハ朋友の交の第一に候人の過
 有を異見して己れ義有る顔して人に伐る間敷候
 利を見てハ義を思ふといふ聖語忘間敷候利欲といふハ人情誰にても有之
 事にて候へ共人ハ如何成候も己さへ利になれハ宜トハ思ふへからず人
 も我も一同に利に成候様公平ニ致候へハ利も惡敷にあらず己一人利を貪
 る時ハ天道に逆シ朋友に惡まるハ故に事も成就せずして敗るハ者也

御確言

卅三

人より謗をうけたるとて怒る間敷候謗らるハからは其身の不修故と思ふ
 べし本より己にさへ惡敷理なくハたとひ謗らるハとも何かくるしかるへ

卅四

き然るを争なとするハ聞えぬ事也

卅五

御確論

下々の者武士へ對し慮外有之時ハ斬捨る昔よりの定にて今も同斷なれと

近年

是迄

手打したりし事を聞ニ大方ハ忍杯にて武士らしく見えぬ故に慮外も自ら出来る事也慮外の出来たる時計武士の心を出さずして常に武士ハ武士らしく見ゆる様にする時ハ人も見そんしなき故に慮外も自ら少く成べし然るを武士らしき身なりにもせずしのひ出て人ニ見そんしらるハ此方より見そんしらるハ様にしたるも同様なり

なれハ慮外有りと己の方に失行有れハ堪忍の上にも堪忍すへき事に候すへて小人は狎るハよりお

こたりも生るなれハ己さへ端正なれハ慮外する者も少き筈之事也さて手打にしてもとゝめを指と不指に心得有へき之本より可殺と思ひて斬捨たるハとゝめを可指又本より殺心なけれと抜合せされハ己の身も危き故無據切はらひたるハ其處を切抜ん爲にて本より殺す心なき故にとゝめハせぬ事なりされはとゝめを指たるハ求めて人を殺したるにて不指ハ全其場

を切抜る爲の事なれハ聊相違なる事なれハ所の定と時のしきにて用捨可有事なり

本文堪忍の上堪忍云々ハ至論にハ御坐候へ共最早ケ様罷成候而ハ所詮士道ハ立不申候其所迄ハ御意無之方可然哉と奉存候乍恐突キ當リニ罷成候御文面ハなるたけ御差略被遊可然哉

本文とゞめ有無の御論如何様なる古實へ御本つき被遊候御儀歎難計候へ共愚臣心得候所にてハ亂心者又ハ人違ひ等にて切り付られ候節ハ格別其外ハ喧嘩にても手打にても一旦刀ヲ拔はなし候からハ必討果し討果し候からハ必とゞめをもさし候心得に御坐候乍去右ハ全く愚臣の心得に御坐候間猶宜御吟味被遊候様奉存候

卅六

天下安くとも亂世の時を不忘常々定置所の軍令等不忘様にしていつ何時公邊より手討の大將被仰付て出陣いたし候供にも指支無之様心掛不申候てハ士たる詮ハ無之候泰平ニても農工商夫々の勤ハいたし候に士とし

て武備無之候ハ、四民の中の遊民と存候常々武を備へ人々の持前を不忘
様に可致候持前の義不分品も候ハ、兼其筋へ問合せ置可申事

士氣を御振被遊候 御意無此上有御坐間敷奉存候

末の方にも此氣味の御意御坐候間重ニ出候様にハ御坐候へ共ケ様なる

儀ハおかへし幾遍も出候方丁寧反覆ニ罷成却御宜き様奉存候

兼其筋へ問合云々ハ追御軍制御改正被遊候後被 仰出候方可然哉

と奉存候左も無之候ハ、果して心服仕間敷奉存候

卅七

此御ケ條無
所殘奉存候

士たる者ハ君より賜る俸祿にて一年の出入を定め常々の經營ハ成たけ省
略して身分相應に普代の家來も持武具馬具の備もし子孫には文武の藝能
を習ハしめ人柄能様教立なは別金銀を貯にハ不及事也然るにさハなく
して非常の金銀を貯へ子孫へゆつりても教なくして子孫愚なれハ其金銀
を守らざるのミならず却御放蕩邪淫の媒となりて金銀をゆつらざるにハ
遙におとれり「されハ武の備をして子孫へゆつりても武道を不教ハ子孫用

子弟教育

此五六行同
し様の儀ニ
御坐候間御
除き被遊候
方御文勢く
だけ不申し
てよろしき
様奉存候

卅八

ひ様も不知有りても當時無益と思ひて賣拂ひ書をつんでゆづりても學問
を不教ハ讀事不能故に賣拂ひ申事に候「されハ金銀を子孫へゆつらんより
ハ子孫を教ゆる程君の爲家の爲に成事外ニは無之事なり子孫惡敷時ハ書
籍武具馬具金銀いか成よき品有りても無益なりと心得子孫を教事を大切
ニ思ふへき也

何役に申付り候ても上より申付候義ハいさきよく思ひいさゝかも貪る心
なく定置處の神文法度之旨を守り人々の職分を不被失様心かけ候義第一
なり文武の義ハ別御申迄にも無之誰何役にても士ハ心掛不申してハ不成
事也

卅九

士ハ義にさとくして利ニうとかるへく候まして子供杯の利にさときハ後
に人柄惡敷成事に候幼年なれハ分別なきとて惡敷事いたし候を捨置申間
敷候惡敷事有之候ハ、父母ハ勿論親類にて屹といましめ可申事に候外よ
り品物持て歸りたらハ何方にて何人より受候哉と精くたゝし譯惡敷候ハ

、屹と責可申候小事なりとて其儘指置候へハ夫なりに濟事と心得追々積悪に成り後にハ父母親類後悔いたし候事まゝ有之様覺申候又幼年ニて文學にてもいたせ武藝にもいたせ年ニすくれよく致し、者ハ幼年ニ内人々譽候故上手ニ相成候者ハ大方無之候若其者卅歳にもなりいよ／＼上達いたし候者希ニ有之候得ハ其事にハすくれ候ても藝をたのミに人を見下シ或は重頭の振舞杯出来る者に候へハ兎角三十をこし候上にて無之候へハ譽らぬ者に候へハ幼年の者事ニ達候とて余り譽すぐし不申宜候子供は子供相應の遊をいたし藝能も子供たけニいたしさえ候ハ、ゆるし可申候十五歳位ニなり候て己より精を出し候心ニ成候得ハ六七年の内ニハ何事も出来る者に候扱又大人ハ學文等はすくれ不申候ても今日辭讓致候事を不存程の人ハ無之候得共子供ハ能々わきまへぬ故たとひ親重役に候ても座上にて辭退もせず人の上へ坐候様にては不宜一度も二度も辭退して其上にて兎も角も致し可申候況や己より上坐の人の子居候ハ、己の子を上へ

不坐様ニ致候は勿論ニ事に候子供互ニ争ひ等いたし候ハ、たとひ己の子の方ニ理有之とも人の子に勝せん様ニ責可申又人の子と共に物を分遣ハ人の子ニ多を遣候様ニいたし候へハ自ら子供ながらも辭讓の道を覺申へ候神樂の歌ニミ山にはあられふるらし外山なるまさきのかつら色つきにけり易に履霜堅氷至とも見えたり

本文子孫教育の致方縷々懇々御教諭ニ趣御誠實御文面ニあらハれ難有御儀にハ御坐候へ共右ハ御はなしの御序人の親ニ一人二人へ御對し被遊候節の御意に候へハ相當仕候へ共押出し候御教誨へハあまり瑣細ニ罷成前後不釣合の様愚慮仕候仍ハ大まかニ被遊たとへハ子弟の教育別心を用ひ禮義廉耻を以幼年ハ仕込ミ可申杯と被遊候ハ如何可有御坐哉何レ本文の儘にてハ家童訓などと申様なる風ニ相成國君の御諭文にハ細過キ可申哉と愚慮仕候

四十

誠信を不失質朴なる者は長く模通事古今同様なりと知へし故ニ昔漢高祖

の時陳平は智慧拔群なる故に疑れ周勃ハ質朴なる故ニ信せられたりき」
れは古も今も花の行ハ好むましく候花ハ散りし實の行を心掛度事也

陳平周勃ニ儀よき御引言にハ御坐候へ共 人君の御論にハ不穩奉存候
巧言令色鮮矣仁剛毅木訥近仁之語ニ御引替被遊候ハ如何可有御坐哉
先頃の 御意存當り候ゆへ申上候

四十一

家相等御國
にて八十人
九人迄ハ信
用不仕候間
尊論を御費
し被遊候に
奉存候

家の大小ハ人々の分限相應の所を考へて可致美麗にハ及間敷候手輕ニこ
し候義は無之事と存候まして江戸の小屋は勿論に候]扱又家を作るに家相
といひて吉凶を見候事有れと日本には本より無之儀にて好物の異國人か
作り出せる事なれハ右様の俗事を實と思ひ過るへからす以之外惡敷事な
れハ必用間敷候何事へも理を付ていへハ一ツにハ尤ニ聞ゆる物なれハ女
子供ハ迷ハさるゝ事にて何事にても理を付て不付事ハなき物故理有りと
て迷ふへからす]

四十二

大臣小臣共ニ金銀ハ入を積りて出る事を加減致し不申候ハ勝手の取直

四十三

樂之條

ハ不成候右様ニ心掛候てさへ臨時に今日事ハ多く候へハ常々手つめニ不
致候ハ武の備も行届申間敷候故成たけ常々の事ハ省略可致候事
風俗を正し武の備出來且經營の爲を思ふ故ニ酒參會藝者を招様の事ハ禁し木綿服をハ

宴指ゆるしたるを左ハ不思して酒會を禁れハ茶會をせんといひ木綿服を免
せハ我等ハむさき事好む様ニいひて我等か前又ハ客杯有之節ハ求て大敗
の服を用ひ扱己か他出の節ハ美服を用ひ夫も士を飾事歟と思へハ服計美
にして鎗も不立又少しく勝手直りたりと思ふ時ハ武の備ハせすして制禁
の場へはしり或ハ湯治等ニ行て求て費を好様ニ心得違者のなきにしもあ
らす武備の出來たる上は人々の程々にて酒も茶も樂ニするハよき事なれ
と何事も時の下知に逆て男だての様ニ思ふ者ハ終ニ身の爲ニならぬ事ニ
如何なる心ぞや

四十四

客畜儉約ニ似たり惡敷心得たる時ハ儉約をすとして皆客畜に成事なれハ心
すべき事に候親子兄弟妻子睦しさより下男女に至る迄主人を難有と思ふ

様になければ儉約ハならぬ者也事と存候さなきニ無理ニ儉約せんと思ふ時ハ却てあるのみならず道にもとり義な欠く事にも至るべし費出者也

四十五 悪筆唐様に似たり今通用の文字ハ本異國を渡たる物にて日本流といふハ無キ事なるニ御家流ハ日本流の書にて俗様なりとて不習唐様も六ヶ敷故ニ不習我流にて唐草様に書散したるハ讀兼る事なれハ筆畫正しく書たるそよき程明道作字甚敬嘗謂人曰非欲字好即此是學也といひしとそ官府の文字ハ別而疎略すへからず

四十六 此御ケ條誠ニ難有御意無所殘乍恐奉感服候無益の費有故と申儀ハ御殘し被遊方廣ク行渡候様奉存候人々にて自考へ其人ニ

古ハ二百石三百石取者も心掛宜しくて馬を持申候處今の世にハ馬を持と申てハ口取中間ニのミまかせ自身ハ牽さへ不致様に鞍轡も華美ニ無之候てハ馬を持事のならぬ様ニ心得たるハ悪敷存違たる事也昔の如く自ら草かりふせ起をするより何事も自身又ハ子弟にて世話をせは持れぬ事も有ましく却て扱ニなる事なり昔と今とハ諸色も格別ニ今ハ高くなりたれハ猶更自身にて世話不可致候てハ不持事也たとへハ三百石にて家内多勢の者を察

より心を付候様可罷成歟

候ハ、同様にても

四十七 さハ家内人別少き者ハ馬持る、筈也然るに馬を不持ハ勝手よき答なるにかと思へ

勝手の悪敷ハ如何と思ふニ無益の費有故なり能々心すべし

御確言

武の備とて具足計を好候て多く集候人も有之、又ハ刀劔を好み候て刀劔計を多集候人も有之候處何れも悪からぬ事に候へ共全備いたし候上にて其餘ハ好候品を多集候ハ聞え候へ共只一方計多集め不申様心得可申候尊きも賤きも

四十八

尊きも賤も妻を離別するハ夫ハ勿論兩親の耻也妻の親ニ教悪敷とも此方へ來りたる時より嚴重ニ教ゆれハ離別する程の事ハ出來間敷を初ニハ人の子と思ひて愛のミにて我儘に指置故ニ後にハ教えても不用様ニ成事也初より教なきと思ハ、妻とせぬかよし妻としたらハ初て來りたる日より教べき也されハ人に娘をもらはれざるハ親の耻にてもらひてより出すハ舅夫の耻也令の棄妻須七去之狀一無子二淫洪三不事舅姑四口舌五盜窺六妬忌七惡疾云々妻雖有棄狀三不去一持舅姑之喪二娶時賤後貴三有所受

犯義絶淫洪惡疾不拘此令七去の惡敷事さへなくハ離別をするハ耻辱と思ふへしさりなから七去の内にも子なきと惡疾の外ハ大方舅夫教次第なるへし大臣にて妾置る者ならハ子なしとて可去ニあらず惡疾有も同斷也此御ケ條も別ニ申上候子孫教育の御ケ條と同斷と奉存候尤子孫教育の條ハ人の難儀ニ相成候儀ハ無御坐候へ共此御ケ條ハ人により惡しく心得違候ハ、指支ニも可罷成と奉存候其次第ハわるがしき者ハ御教諭をも不用容易ニ妻を離別仕り可申候間差支有御坐間敷候へ共謹厚なる者ハ御教諭の旨ニ違ひ候を遠慮仕りさし置兼候妻をも忍てさし置キ甚難澁仕候類安心不仕候此類ハ風俗直り候上にハ相分り候事に御坐候間御除キ被遊候ハ如何可有之哉

四十九

人と議論あらハ一應二應ハ己の了簡も云べけれと無理ニ引事等して辨舌ニまかせて押勝んとハ思ふ間敷候一二應いへハたとひ勝すとも此方の理よくハ聞人惡しと思ふ間敷也

五十

「朋友互ニ口論杯いたして指違可申様の事有之候とも兩人共ニ指違ひ死候て君の爲に何ノ益か有へき哉其心を不棄して非常の節敵ニ向ひ互ニ手柄をして勝んと思ひ常々は身を全クする様ニ心掛候こそ君父へ對して忠孝と存候へ一朝のいかりに其身を不忘様にくれくれも致度事也」

人臣ハ身を君へ致し置自分の身に無之臣ヲ御身とさへ訓候程候得ハ本文御意候趣乍恐御的當ニ御論にハ御坐候へ共百四五十年も已前戰國の余風残り居候節ハめつたニ打果し又指違ひ等仕候儀と相見候處當時ニ風俗にてハ人々上分別ニ罷成たとひ指違候様御達御坐候も左様なる者ハ容易ニ有御坐間敷奉存候慮外打ハ自分の身ニ拘らず候ゆへ時々出來指違ひハ絶る無之様相成候風俗嘆敷奉存候仍ハ此ケ條ハ御除キ被遊候ハ如何可有御坐哉

御確論

五十一

馬ハ常ニ危き場へは不乗様に弓鐵炮ハ常ニ危き所に不致様に槍劔術等達者にても常ニ危き場へは不參様ニ己の身を大切ニ致候ハ非常の事有之

五十二

游惰の士風も此御教諭にては心肝に徹し可申奉存候

時君の用ニ立可申と心得此家ニつかへ候からハ我等か人に候得ハ己か身
 にも己か身と不思大切ニ致候へハ君父へ對しても忠孝ニ成へく候事
 士農工商夫々の持前有て今太平にても農工商ハ夫々の勤ありてをすれハ夫々の
 道具ハ備有事なり然獨り士に至りて士の備なかるべけんやに大平久しくつゝきたる故に士の勞ハ薄く成たれば
 ケ様の時の入用の道具未備者ハ備る様に心掛へき事ニ然るに太平なり
 とて武道の嗜もせず煖衣飽食ひ今日迄安全ニ暮したる厚き御恩をも忘
 れ寒暑風雨に合逢てハ忽ニ邪氣を受る様ニ柔弱の身となり且驕佚ニのミ長
 しなは士は四民の内の遊民也能々此所を考へ恐多も
東照宮神君の艱難辛苦ましまして太平天朝を輔翼し諸侯を鎮撫しに治給ひしより今も將軍家の御恩にてか
 く迄生レなから安樂ニ暮す事申迄にも無之儀に候へは士たる者ハ士の備
 をして万一事あらん節は我等天朝上邊將軍家の御爲にハ命身を指上候大恩を奉酬候所存ニ候へハ
 各も其心得にて我等何時出陣いたし候とも指支無之様常々心掛可申候
 右ニ件々愚昧の了簡致候處認爲見候ゆへ尤と存人々相守り候ハ、於

我等大悦不過之候也

天保三辰十二月廿一日

以下東湖加筆

先日御下ケニ罷成候御親書御下ケ被下置候處其節一ト通り御請申上置
 候處尙又得と拜見仕候上左ニ申上候
 一惣御家中へ御諭し被遊候外ニ樞要の御役々へ別段御諭し被遊るハ如
 何可有御坐哉之旨右ハ最早去春中思召を以御諭し被遊候由且其御大
 意ハ云々之故被 仰含候由乍恐御尤之御次第に奉存候右様の御諭文
 一旦被 仰含候上ハ此旨又々別ニ被 仰出候迄も無之御儀勿論と奉
 存候但御意之通り御懷内のにて被仰含にも候ハ、ハ政府之分もやはり
 他にて拜見相成候も却る御響キ合宜き候様ニも奉存候先日も申上
 候通威公様御諭文ハ用達奉行人目付諸役人輕キ者連と申御諭文一
 通ニ御認被遊家老大寄合城代と一通ニ御認被遊諸番頭諸物頭使番も

齊昭親論原案 (天保三年)

三百十五

一通ニ御認被遊御目附へ一通町奉行郡奉行代官へ一通と部門を分ち御認被遊候様ニ相見へ申候處此度ハ 思召を以御趣向を御加へ被遊御諭し被遊候ハ、書經杯大抵ハ教諭の文と奉存候譬へハ頭へハ組子を大切ニ取扱候儀を被仰合組子へハ頭を敬候儀被 仰合夫々自分へハの教諭を拜見仕候節^事あまり一方へのみ御ひいき被遊候御諭文と人々奉存候も^下以^上聞

一言路^事之御諭に付唐の太宗云々之御諭實ニ未發の御諭毎度奉感服候畢竟 九五之御立場ニ被爲在御誠被遊御儀と奉恐察候愚臣等如キ人之下々の了簡にてハ何等相分り不申儀ニ御座候愚臣杯ハたゞ言路を開キ候ハ古來美事ニ相成居候事ゆへ何れにも御ふさき不被遊方宜しき様と一筋ニ存詰候ゆへ追々申上候事御座候 堯舜の事を稱候にも第一ニ允恭克讓開四門達四德又ハ取於人可善杯と申皆言路を開キ衆と商候儀を專一ニ〇中斷

平士の權輕ク政府の權落候ハ上書ゆへと被 思召候旨 人君の威輕政府の權重ク相成候ハ言路塞り候ゆへと存候 若年の愚臣御先代様方の御模様ハ不相心得候へ共武公様御初政にハ大ニ言路御開被遊御末年ニ相成候もとふく御塞きハ不被遊候へ共哀公様に至り上書之族ハ御目付方へ指上候様被 仰付名ハ御開キ被遊候ハ實ハ御塞キ被遊候御儀ゆへ御國一般ニ嘆息仕候へキ且又文政五年ハ政府之外ハ一人伺不相成様相成今以其御居リニ相成居何共嘆敷次第御坐候

校訂者云 本書は烈公の原案に東湖朱批を加へたるもの、本文中□の中に挿入せる部分は東湖の批削にかゝり、傍注は則ち其訂正文なり、欄外の記入も亦東湖の加筆にして其長文なるものは便宜之を各項の末尾に掲記せり。

藤田東湖書案

齊昭親諭原案 (天保三年)

三百十八

第三 藤田東湖書案

一 藤田東湖書案(推)文政十二年カ

御凶事實ニ

國家之御大變痛哭之至何共絶言語候御儀委細不及申上候此御砌愚存等
陳述仕候儀如何敷奉存候へ共此節の勢實ニ

國家興廢之一大機會と奉存候間乍恐是非
御英斷不被爲在候ハ不相叶御時節と奉存候ヨへ區々愚忠難默止大意
左に申上候

一 哀公様御儀御不幸にして御生育ハ不被爲在候へ共まさしく御賢弟の
上公にて御控へ被爲在候上ハ

御繼嗣之儀是迄何等異議有御座間敷儀指見へ候共大臣之面々大義相辨

候もの少く其内ニハ眼前の利欲を貪り一身の私を營み候を事起り或は上公殊々外御耳遠ク被爲入候様申ふらし或ハ御病身と申或ハ御不弟と申又ハ他へ御養子ニ可被爲入と申儀又ハ御連枝様ニ直し奉るべきと申儀杯兎角小人の奸計乍恐

上公をのけ物に仕度存候ゆへ年來右の邪説相行ハれ御國中ハ勿論他所にても自然と申ふらし候儀に御座候間忠義の士竊かに切齒仕居候儀一朝一夕の故に無御座候先臣次郎左衛門兼々憂懼仕り度々申聞有之殊ニ死去仕候前日右之儀

先公ハ呈疏可仕と心懸ケ苦心ニ次第會澤恒藏へ内話も仕候所俄ニ中風相發言舌等相分兼其儘死去仕候付右遺意ニ次第恒藏ハ呈疏仕候事も御座候間愚臣不肖ニハ御座候へ共右之儀萬一ニ御次第も被爲在候ハ、不願身命微力を盡し

君父へ相報候半と覺悟相究能在候儀に御座候然ル所

先公御大病ニ被爲及候へハ果して右之奸計相萌し候段相分り山野邊兵庫を始しめ川瀬七郎衛門會澤恒藏杉山千太郎等何レも必死ニ覺悟ニ即夜出立仕候間愚臣儀も不取敢一同罷登り有志之士追々馳登り候所先公深遠ニ尊慮小人の奸計兼御洞察被遊候御儀と相見へ御遺書等御行届被爲遊殊ニ天人合一之勢にて奸計も成就不申

上公御相續被遊 宗社磐石之安を被爲保候御儀此御砌ニハ候へ共御國中士民何レも 社稷のためニ雀躍仕候儀申上候迄も無御座候扱此度之儀ニ付 御國中一統の様子を以熟察仕候ニ士人の儀ハ勿論下々細民小者ニ至候迄何レも義氣奮發仕居候次第實ニ一ト通り之儀ニハ無之畢竟是迄奸臣共種々の術を以

上の聰明を壅蔽し奉り一國の義氣を無理におさへ付ケ置候ゆへ此度ニ一時ニ發泄仕候氣味も有之且ハ

上君の御英明下々にても兼奉承知居候間御相續被遊候上ハ定る非常

の御決斷御用被遊中興一新之御盛業可被爲在と耳目を改相待居候様子に御座候間申上候迄ハ無之候へ共何卒非常之御英斷被爲在

上ハ

宗社へ之御忠孝御立被遊下ハ一國衆人の望に御答被遊候様奉存候

一中興一新の御政事誠ニ

上公の御大業に御座候へハ其手立テの一々容易ならざる御儀に御座候間先ハ人材をも御舉用被成大體御見通しの上御施設被遊候御儀と奉存候ゆへ只今ハ彼是と申兼候へ共御忌明後御大業の御手始第一前文申上候姦物の小人御しりそけ被遊候の御一ヶ條に可有御座存候江戸水戸諸有司等總テ御役人と名の付き候もの大てい小人多く御座候へ共そのもの不殘御黜け被遊候儀と奉存候先つ指當り江戸ニ有之候三四人水戸にて兩三人奸臣の巨魁ヲ御黜け被遊候へハ一國の人氣取立申候十分行届右の奸臣共たとひ此度姦計の儀無之迎も一體是迄 君上の聰明ヲ壅

蔽し奉り一身の私欲ニのミ取懸り賄賂公行飲宴遊興に耽り御家中の風俗を破り萬民の艱苦を不察候次第言語同斷之儀是非御黜ケ不被遊候てハ眞の御政道ハ決る相立申間敷奉存候況ヤ此度姦計之義一々明證有之是ハ數ヶ條有之候へ共是迄定テ如何様ニも御心の當り可被爲在候御儀と奉察候間一々ハ不申上候の上ハ猶更御英斷の御仕置不被遊候ては不相成と奉存候事

二 藤田東湖書案

天保五年六月六日

甲午六月六日大久保加賀守ハ被遣候御別封御案文

内々以別紙申進候去年關東の不作天明已來の荒歉とも可申處天明の度ハ江戸町家杯も不穩事ありと承候然ルに此度ハ人氣至て穩にて一人の横行いたし候者ありとも不相聞又一人の餓孍ありとも不相聞府下幾万の人民安穩ニ暮し居候事上の御仁徳ハ不及申御役人の處置も各其宜きを得候儀と爲天下恐悅此事に候扱當年の豐熟御同意祈る所に候へども今日迄の氣

候ハ兎角陽氣薄く此上如何可有之哉と朝暮致苦心候年來心付居候愚存も有之候處容易ニ紙ニ筆し候も如何と存是迄胸中ニ藏候へ共乍不及 上の御爲を存愚忠黙止し難く先其一二を相認申候乍然傍觀といひ又愚昧の説といひ旁了簡違も可有之間可然斟酌も有之候ハ、大幸たるべく候

一太平の御代打續キ府下の繁盛古今ためしも無之恐悅至極に候得共今日と相成候亦ハ其弊も亦不少段ハ諸人の知たる所に候農民ども本業を捨末利に走り田舎を去て市井ニ就候ハ世間一統と存候處就中府下の繁盛無比類候ゆへ國々より府下へ志し候亦出候者多きに隨ひ游手浮食の民増過いたし乍恐 御膝元の地國々の出奔人又ハ追放人等の集り處の様相成候ハ何共嘆敷事に存候右様の人別増過候ハ表向賑々敷様にハ候へ共風俗の害と相成候處ハ不容易又凶荒火災等に付格別の御救を受候類多くハ右の民ニ可有之又火付盜賊等の科にて御苦難ニ相成候類も多くハ右の民ニ可有之かた／＼無益にして有害の人別と存候左候迎 御救

無之候へハ眼前及飢餓一人たりとも府下に餓莩有之候へハ乍恐 御仁徳にも拘り候様相成甚不容易事に候算勘等之事ハ不案内に候へ共大數を以て了簡いたし候に男子一萬人一年にハ一萬七八千石の米穀を費すべし凶荒の時節國々有用の米穀を運送せしめて府下無用の民を養ハむよりハ無用の民を減して有用の米穀をゆるめ候方可然様存候仍亦ハ只今之内府下無用の人別を改められ御領私領夫々御引渡ニ相成候亦ハ如何可有之哉人別之事ハ定亦入組候事も可有之候へ共簡易にて速ニ埒明候手段も可有之候是等ハ扱候人の任にあり候事と存候左候ハ、國々も其餘風になひき城下々々無用の人別減少いたし在々へ復候様にも相成根本を實するの一助にも相成べく候

一大小名をはじめ奢侈日ニ長し無用の珍器玩物等次第ニ増過いたし候處就中無益なるハ阿蘭陀の品と存候年々此方より渡し候金銀銅の類ハ神國の寶に候處彼國より渡り候羅紗其外皆不急無用一切無之候迎も神國

の事欠にハ成間敷古來交易の品を照し合せ候ハ、此地へ渡り候分ハ追々塵埃と相成彼國へ渡候分ハ今以長く重寶と相成居候半昔の人にハ十文の錢を川へ落したるさへ寶の埋れん事を惜み過分の錢もてたい松を買是を求たる事世の美談と相成候處川へ落たる錢ハ世間へ通用せずとも神國の地を離るゝ事なし阿蘭の交易に至候は一たひ海外へ渡たる寶ハ再び神國へ歸る事なく一旦の御利益ある様にてても大觀する時ハ神國永々の損失無此上事と存候尤寛永以來西洋國々一切入津を禁し給ひたるに阿蘭のミゆるし給へるハ夷狄を御するの長策とも可申候へ共古今の時勢相違有之候へハ阿蘭の教法其外心得等も今ハ如何可有之哉先年シイホルトの事を以考候も蘭人の心跡甚以可惡事に存候先年一覽いたし候蘭書の内にも神國の模様委曲ニ認候分も有之候得共旁今にてハ害のミ有之様相成候間以後阿蘭の交易一切御止ニ相成候ハ如何可有之哉尤彼國より渡り候藥種にハ奇品も有之又織物等にて武器の飾等

ニ用ひ候品も有之候ゆへ此處如何と申人も有之候へ共富貴の人ハ海外の奇藥を用にも好の儘なれども格外の長壽を得候者も無之貧賤の者ハ中々蘭藥等を服する事を得ざれども却て壯健なる者も多く且むかしと違ひ藥種等の事も近來大ニ開け候へハ大抵此方の藥にて事済可申候武器の飾等も畢竟外國の品を貴ミ候風俗ゆへ競てこれを用候へ共是ハ制度の上にて御仕向ケ有之候ハ、下々の人情ハ如何様にも相成可申候却て夷狄の品ハ汚ハしきとて賤しみ候風俗にも相成へく候へハ兎ニ角ニ和蘭の交易ハ御止ニ相成候も御差支無之様存候もし又廣く海外諸國の長する所を取て神國の助となし玉ハんにハ阿蘭の通路一切ニ絶へきにあらすとの事にも候ハ、彼か情實能々被遂吟味むかしの如く神國へ忠を盡候様ニ制御し玉ひ交易の品も此國にてハ金銀銅の類を渡さず彼國よりハ可成丈有用の品物持來候様ニ御定有之候ハ如何可有之哉何れ阿蘭の交易是迄の通りにて被差置候てハ前書の外にも尙大害有之候

様存候間何と歟御處置ありたき事に候

六月六日

三 藤田東湖書案

天保五年六月廿四日

再ひ大久保加州へ被遣候御案文 甲午六月廿四日謹草

先頃ハ別封御答逆縷々芳諭之趣披閱いたし候迂濶の論耻入候得共任御懇
意愚忠吐露いたし候處劇務の御中逐一報答時勢人情等委曲御示諭之次第
御厚意毎度不堪感謝奉存候仍再三熟覽之處遊民を減するの說ハ既ニ寛政
年中其御所置被爲在候へ共時勢一變追年陵遲云々の旨又和蘭交易の利ハ
莫大にてこれに易候利不容易且近來ハ砂糖人參等却る國品の多きを憂候
姿ニ相成享保間脱アルカの御深慮とハ表裏いたし前後左右故障のミ多くの當の
事も行ハれ難きの勢具に承知いたし候惣體の勢如此候てハ一二の美事行
ハれ候筈無之候へハ遊民を減候事も中々急々にハ行ハれ不申事と存候處

せめて此上其數増過ニ不至漸を以これを減するの策あり度事に存候阿蘭
交易も右同様急々にハ相止兼可申候へ共先書にも大意申述候通り此國ハ
ハ可成丈有用の品を不渡彼地へハ有用の品を注文いたし譬は藥品等是迄
ハ此地に産せされ共行々産殖ニ可相成類其外すべて彼の長を取て我の用
を資るの意を專といたし候ハ、享保の御深慮にも叶ひ且他日の機會
次第交易御止ニ相成候も差支有之間敷候併時勢人情云々の通にてハ是
以行ハれ難くも候ハ、束手候外無之候扱右等之事ハ姑ク置キ當今の勢年
來染込候弊風ゆへ沼津泉客と成候後もやはり依然たる姿にて上下心醉中
ニ候へハ醒者の論辨別之人も少く且ハ百君子一小人不足有餘の勢何事も
九天上方御再興の御赤心不被發候ハ所詮動キ申間敷旨段々御憂念之次
第忠義誠信何様表ニ隠れ候様相見乍不肖不覺感動慷慨いたし候拙者兼々
存候ハ今日の九天上まさしく寛政の九天上ニ被爲在候へ共寛政と今日別
世界の如く相成候ハ畢竟浮雲の壅蔽ゆへニ可有之外々にハ何程苦心候

ても無詮候へ共當路有志の人々至誠の工夫を積壅蔽を除き再び青天を仰候ハ、寛政ハ扱置享保の昔ニ挽回せむ事も難るましく然ルを徒ニ浮雲の自ら散候を待いたつらに天上の自ら清明なるを待居候ハいつ迎も機會ハ有之間敷當路の人々ハ勿論懿親の末を汚し候拙者輩迄可耻ニ至とのミ存居候處沼津の如キ横天の黒雲自ら散候てすら形勢の依然たるを思へハ天下の事元より常理を以論すへからざるものにも可有之哉御同意仰天大息此事に候老兄杯も享寛の風を被學候半杯と群小目を側候勢且安眠太平を甘候ハ、衆人の嘲も可有之歟と御心配ニ段御尤にハ候へ共乍慮外是ハ一向御頓着無之事と存候如何敷申分に候へ共當今の勢其弊極り候ゆへ歟少く志有之候者ハ竊ニ中興一新の政を望候様相聞候處閥閥の家といひ忠誠の實といひ天下の人望老兄の一身に歸候段ハ拙者の謏言に無之候然ルに萬一讒を憂議を畏れ區々の嫌忌を避萬一奉身自退の計に被出候ハ、群小の邪焰いよ／＼熾んなるべきのミならず當路一人の大事ニ擔當すへき

人無之中興一新の仁政を仰候事も長く不相叶天下不幸有此上間敷候機會の來候ハ終極なき事と承候間申迄も無之候へ共幾重にも爲天下努力自重被成候様にとくれ／＼存候厚義に感候餘り中情十分ニ吐露いたし候千萬長者の推恕を祈候以上

六月

二啓御細書ニ趣別入御念候事ニ存候如論十分の暑熱御同意大慶いたし候以來とも愚存無伏藏可申進旨厚ク服膺いたし候其旨意ニ狎候様にて如何敷候へ共海防ニ事多年愚慮いたし候處近頃出國中東海の形勢目撃の上愚案の一策有之候へ共容易ニ建議いたし候ハ、徒ニ狂愚の嘲を招キ席上の笑柄と相成候のみにてハ行ハれ可申事も行ハれ不申上の御爲にも不相成候事と相扣へ居候處朝暮懸念候事ゆへ老兄へハ近々内ニ及御相談候事も可有之乍序先申進候以上

四 藤田東湖書案

天保十四年十二月六日

辛卯十二月六日

乍恐言上仕候奥御右筆深澤甚五兵衛儀去々月中病氣に相引居候由之處追々風説ニ右役所同勤ハ勿論頭取等迄度々甚五兵衛方へ罷越出勤之儀すゝめ候へ共今以出勤不仕候由之處此儀ハ諸人第一ニ耳立仕居候儀に御座候間悉ク御熟慮被遊御至當之御處置被爲在候様仕度乍恐申上候御家中の内役人風と申儀有之何役ニよらす御役方相勤候者ハ右の弊風ニ染みやすく就中御右筆方之儀ハ執政の手代同様ニ有之候間別近頃輕薄の風ニ流れやすく隨右役所へ御擇みニ相成候人物以前迄ハ皆俗吏中の尤俗なる者ニ相見へ去年已來の如く夫々可然人物右役所へ御入被遊候儀ハ祖宗以來始之御英斷と奉存候
扱又右の如く役人風ニ染みやすき役所にて甚五兵衛の如く節義廉耻を辨へ正議を以身を引候義是又

祖宗以來始之儀と奉存候甚五兵衛儀ハ御右筆方二番席ニ有之一番席の原田善衛門先日轉役被 仰付候上ハ甚五兵衛筆頭ニ相進み平勤にても筆頭と申候てハ頭取ニ次キ候立場に御座候間甚五兵衛立身を好候心有之候ハ、相引候筈無御座候

此度數人御除キニ相成候内に甚五兵衛儀御殘シニ相成候上ハ此上精勤仕り候ハ、
上にも御満足可被遊執政大臣も大慶可仕候へハ甚五兵衛追從の心有之候ハ、相引候筈無御座候

先年川瀬七郎衛門轉役被
仰付候節同役酒井市之允存意申立候へハ小普請組被 仰付候例も有之況や此節病氣引等仕候へハ黨と申事ニ相成候ハ指見候儀甚五兵衛黨と申俗論を恐れ候ハ、相引候筈無御座候

近頃川村新七郎病氣と稱し相引居御普請被 仰付候世上の取沙汰にも甚

五兵衛引込候意味ハ新七郎トハ懸隔の相違に候へ共萬一執政大臣甚五兵衛の主意強キを惡み理の異同に拘らす近例を以御處置ニ相成候へハ如何様可被 仰付も難計儀甚五兵衛罪を畏候ハ、相引候筈無御座候」
甚五兵衛少しく道を枉候へハ眼前身爲に相成候儀をも一切頓着不仕引込罷在候段畢竟節義廉耻を失候て 御奉公付候ハ不忠の至と申所義理明白ニ吞込候ゆへと相見へ其忠誠天晴頼母敷人物ニ有之段ハ此度の一條にても相分り申候間却テ格別ニ御擧用被遊候可然人物と奉存候申上候も如何敷候へ共河津安助松崎新八郎兩人は頭取職ニハ決して相當不仕候
安助儀謹慎に惡事等仕候男にハ無之様相見候へ共何れにも小氣に器識無之既ニ先年御徒目付被 仰付候節其師故三原甚五郎承候可安助にて御役人が勤まると申ハ奇妙なる事と申候由猶又増子幸八郎儀安助親類ニ有之候處幸八郎人物の鑒定等ヲハ隨分公平なる老人に候へ共安助の不器量ヲハ嘲り居候右ニ通師弟之中親類之中にてすら不器量の鑒定に候へハ

安助の不器量ハ公論に御座候新八郎儀ハ婦人女子同様の人物一向論するニ不足候扱兩人共頭取職不相當に御座候へ共せめて舊弊さへ存し不申候ハ、格別に候へ共兩人共八郎左衛門御政事を亂し候節すら數年相勤居候人物に御座候間舊弊ハ自然としみこみ居候ハ指見候儀其上小氣にて器識無之候へハ惡ヲ爲の心無之候も正論をハ忌嫌ひ候様相成やはり奸曲にも相當り候事出來候儀安助にハかきり不申候事に御座候右の兩人被指置候ハ所詮御改正ニハ相成兼候間可然御處置被爲在候様ニ奉存候乍去先年右役所相勤候者之内より御擇用に相成候ハよきと申所が井上次郎太夫位のものに其外ハ猶更安助新八郎にも劣り候類ニ御座候間御判讀ハ御六ヶ敷可有之候へ共幸ニ善衛門甚五兵衛兩人へ被 仰付可然奉存候一體善衛門等ニ人物如何様の振ニ入
御聽居候歟其容良のみ 御一覽被遊候も其忠誠御分り被遊候風の人物ニ有之候處善衛門御儀ハ御除キニ相成甚五兵衛ハ相引居仕合扱々嘆敷次

第に御座候扱又松藏庄藏迄一時ニ再勤被仰付候へハ猶更無此上候へ共此儀御六ヶ敷も御座候ハ、持前□之方にて悉ク御親用被遊御侍讀ハ不及申

文公様武公御代の如く御機密之儀迄も御相談被遊可然人物と奉存候左様にも罷成候ハ、去々月已來何となく動き居候人氣も相しつまり 御改正も御行届ニ可相成奉存候

右等之儀何れも國家の大事に候處存分申上候段恐入候へ共指當り其五兵衛御處置ハ一國の目當ニ相成候儀にて乍恐

御不出來被遊候へはいよ／＼始終の御模通りニ相拘り候儀ゆへ無伏藏申上候前にも申上候通役人の風儀ほど鄙劣なるものハ無之孔子の所謂鄙夫の與事君哉其末得之也思得之既得之患失之苟患失之所不至と申候儀鄙夫の腸古今同様と奉存候一昨年迄の御役人逆も不殘姦邪にも有之間敷候へ共右役人風のつり候ものにて思得之患失之候より無所不至の惡事へも

同様仕候儀と奉存候

上にて最初々正しき方へ御引廻し被遊候ハ、中にハ相應の人物にて相通り候もの可有御座候へキ宋英宗臣下の忠邪ハ誰／＼ニ可有之と傳堯俞ニ尋けれハ大忠大佞固不可移中人之性ハ繫上所化と申儀至極尤と奉存候奥御右筆ニ相成候へハ古役ニ相成度存古役ニ相成候へハ頭取ヲ望み頭取に相成候へハ御加増等を望み又踏はずし候を恐れ候様なる役所風の中ハ其五兵衛如キ廉耻の士御座候儀畢竟二三年來の御風教の驗ニ御座候間此度の御處置幾重にも御熟慮被遊役人風の舊弊次第ニ相消し節義廉耻の風御廣め被遊候様仕度奉存候今日ハ

義公様御忌日にも有之臨書別不堪感愴之至候已上

十二月六日

五 藤田東湖書案

天保年間

十一月三日加賀守に被遣候御書

日増ニ寒氣相募候處彌御清榮珍重存候扱ハ南北の事内存書認置候分相添
去月申進候振も有之候處入御念其節も甚五に御申聞も有之殊更去ル晦日
爲御答兩通御示諭之趣毎度長文申進候處御繁多中縷々把筆を煩し候段扱
々氣之毒いたし候仍亦再三熟覽之處逐一御尤至極就中銚子浦賀同日の論
には難相成又北方ハ難捨置段勿論に候へ共公私内外行ハれ兼候勢又海防
を以南方を願候へハ名義を假り虚事に涉り候様成行候勢又是迄さへ十分
の御助力を仰き候へハ南方逆も容易ならざる趣一々御示諭且ハ御警誠の
意味實ニ不堪感謝之至ニ候御示諭之通り北海ハ大患と存候へ共銚子ハ左
迄ニハ無之實ハ南北懸隔の相違に候へ共北ハ遠方にて一向領分へも拘ハ
らず南ハ近所の事に有之眼前なる近所をさし置いらざる遠方の事を論し
て内願申立候も如何敷と存兩様之内トハ申候へ其實ハ北地の方篤く存入
候故南方の事ハいまた得とも不相考候一體北方之事ハ兼々嘆敷存居候處

追々勝手窮迫又々 御助力を乞候外無之候へ共同し惠を仰き候には御損
分少く 御爲ニ可相成所を被 仰付粉骨を盡し度有之哉と爲御□□是亦
懸御目候之本文御挨拶委細ニ可認と存候へども御繁多中又々御再答にも
預り候亦ハ氣之毒いたし候故委細の意味ハ甚五へ内密申聞置候全く不用
の事ながら御閑暇の折同人口頭を御承知尙又御心付も有之候ハ、極密同
人へ御申含ニ相成候ハ、可爲大幸候

別紙牛天神下の儀も畢竟ハ御扱有之候故と大悦致候御挨拶ニ何ぞ進
度候へとも故水羽と違ひ〇抔も如何故何ぞと存候へ共未心附も無之
候若御心附も候ハ、無御遠慮甚五へ被 仰越候やう致度候此上ハ何
卒南北之内何レとか御扱振有之候様希候 燈下亂筆御
察覽希候也

加州殿へ參

水 戸

右御書被遣候節甚五左衛門口上ニ覺ニ御渡被遊候御直書如左
内密承知の通り南北之事先日内々龍の口へ及相談候處其節も其方へ懇

ニ申聞有之尙又過日其許を差出候答書致熟覽候處繁多の由縷々答之趣段々深切の事とも毎々不淺存候我等をも挨拶申越候へ共折を以其方よりも篤く申述べ候扱先日の書付ハ容易ならさる次第且大意のみにて不都合の事も有之候へ共元より愚存打明し置候人ゆゑ其儘遣候處委細推察いたしくれ我等か爲を存し勘考の様子ニ相見へ實ニ安心いたし候尤北地の事ハ所詮六ヶ敷事と見候へハ今更彼是いふハ無詮候へ共世の中の事ハ難計ものにて此後北地如何様の騒動等あるまじきものにも無之其上大意をハ口出したし候からにハ迎もの事委細の處をも全く心得迄ニ申通し置度候乍去度々長文申越又々答書等にて有之様にテハ迷惑故極密其方へ申聞候仍而全くの心覺の爲別紙兩通思ひ出し候まゝを認候序次第行違ひ無之様物語り可申別紙ハ追而火中すべし

御別紙也

北の事

一萬一北方の心願叶ひ候ても水戸は本國にて北方ハ飛地なれば水戸を捨置き北方へのみ傾き候てハ不濟ハ勿論なりしかし水戸ハ平輪北ハ草ざりも同様にて御威光ニ拘り候事なれば一ト通りの飛地の扱にてハ是又不濟事なり扱我等自身立入候迎も交代杯いふ事にてハ届き兼候ゆへ多年彼地ニ居着候而存分下知せずしてハ不叶事なり鶴千代幼年なれども此地ハ御膝元の事故尾紀にて持合且又連技も有之候へハ御差支にもなるまじく候

但今の身分にて遠方ニ永住といひてハ御故障にもなり候ハ、隱居被仰付候て少しも厭ひ候事無之何れの道にも御故障無之便利宜しき方可然候隱居之上なれば諸事御手輕くなり候て却てよろしかるべし

一尾紀ハ隔年交代當家ハ舊來定府にて一體三家といふ内尾紀とハ次第の違ひ候意味ハあれども威義の二公ハ何れも十度計御歸國有之候得

ば外大名の定府とハ又次第も違ひされれば北方へ被遣候も了簡の付ケ次第にて畢竟北地ハ格外の任にて既ニ先年騒動の時も重き御役人を被遣候類にて國主外様等へハ被 仰付がたき故乍恐 御目代の御意味にて水戸を被遣候といふ様にもなり候へバ夫にてこそ當家の甲斐ある様存なり

一右の如く遠國へ御はなし被遊候も 御氣遣なきハ御續キからの者にまさるハあるまじく候しかし迷惑なるもの被遣候ハ、御むこきといふ事もあるべく候へ共内願の者被遣候ハ格別たるへく其上にも被仰渡候廉により當人の面目無此上候へバ外々にてもむこきとハいふましく候たゞけしからぬ馬鹿もの杯評ハあるべけれど右様の事にハ元より頓着なし

御付札 むかし語りなれども東夷征伐として皇子を被遣候事又上野上總常陸の三ヶ國に限り親王を以て大守となし玉ひたるも東夷

の防きより起りたるならむかさねハ却て御親み被遊候廉を以

遠國の大任被 仰付候ハ當人の本意なるべし

一當家ハ北國の押に被差置候意味もあれども北國には大名も數多く萬一の時水戸にてのみ喰留るハ中々不容易候然ルに北海に飛領出來候へハ水戸北海前後より挟み會津ハ其横腹をつき候勢になり候故奥州筋の御固めにもよろしかるべし

一我等か如く身命を惜ざる馬鹿ものも代々ハあるましく候へハ後々の振通り如何とも思ふへけれと是は御定次第なるべし定府又近國大名ニくらぶれば西國大名の海陸數百里の參勤ハ誠ニ一義なる事なれと古來ハ御定なれば事ともせぬ類にて水戸家ハ代々四十歳前後にて隠居いたし北海見置のため引移り候ものとさへ御定ニなり候へハ鶴千代始其心得にて生長候ゆへ何の次第もあるまじく候

但隠居後も北海にのみ永住ハ不宜との事に候ハ、五年七年ニ一

度參府もなるべく候兎角御掟次第たるべし

一北地の往來陸行にてハ莫大の失費のみ懸り不行届基故願之上丈夫なる船を造り人數并荷物等東海より運送せば隣へゆくも同様なるべし但丈夫なる船とハ異國の法にて製作し形ハ目立ざる様日本の風ニ出來べきと思ふなり大船の事ハ重き御定ある事なれど此方の製作にてハ無益ニ破船死人のみ出來候事故御救になり候處を以願ひ候ハ、濟可申歟夫にても御故障になり候ハ、御名目ハ御船の分ニ濟ニ亦もよろしく候是ハ追々承知の通り蘭船製作方の書籍も買入置候事故北地の事に拘らず一統御救の爲船の製作御試みにも成候ハ、永々の御仁惠なるべし扱船製作の書物ハあり候ても第一入用にハ困り候へ共東海邊富民も有之候へハ商ひ荷下積ニいたし候様の事ゆるし候ハ、下々願ひ出候ても入用を助け候^{脱カ}半^カ存候

(編外)認候跡にて考候へハ富民云々ハあまり懐合打明し候様にて如何なれば咄にも不及

(御付札)本文ニハ御かまひ無之異國へ參り候事不相成様ニ大船御禁にも相成居候て御故障ニ相成迎も不相成候儀に候へハ致方無之候故又此方の船にても丈夫ニ致方も可有之哉の事

一北地ハ詰候士ハ多分土着にて可然候夫々家中の内當人の好候もの次男三男又ハ一旦の咎にて暇ニいたし候もの又浪人者兵家武人の類むかしと違ひ武士の直段今時ほど安き事無之候へハ少々のおてかひにても随分手ニ付可申候

一是迄土地の開けざるハ人少き故と存候へハ人を殖し候事專要なるへし是も非常の願なれとも天下にて輕き死罪の者一等御ゆるめ又ハ遠島になるへきもの不殘被下置領中輕き死罪重き追放の者ハいふニ不及彼地へ植付夫々家内をも爲持仕法立にて爲切開候ハ、追々人も増

過すべき歟

但士も實心か 神國の爲を存入候者歟又ハ生死不知の無分別又ハ利欲にて好み候類なれども實心か忠節ハまづハまれなる方と存候又罪人も身命を助り候事故善心ニひるがへり候ものも可有之候へ共まづハ元來の惡徒ゆへ士民ともに差引手配り方餘程六ケ敷ハ差見へ候しかし乍不及實心に扱格別ニなさけをもかけ又嚴重に取示し候ハ、届かさる事もあるましく候扱右様の惡徒共の一命御たすけニ相成候へハ 御仁惠の一端にも相成又ハ掃口出來候ハ天下の御爲ともなるべきなり

一何に付候も勝手不如意にてハ中々届兼候へとも我等存意ハ武備其外も花々敷かさり立候所存ハ更ニ無之幾重にも手輕ニなるへき處ハ手輕にいたし何も實用專一と心懸譬へハ大筒ハ海防第一の品なれども貫目已上の筒澤山一時ニ張立る杯ハ不容易候へハ木筒紙筒等便利

宜しきをも取ませ其外臨時の工夫もあるべし銅筒一挺にて防き候ハ木筒等十挺にて打立たる方實用にも叶ふべき歟

一蝦夷といひ候へハ何となく事かわり候様なれども往古ハ奥州ハ勿論常陸邊も多分ハ蝦夷半分の土地と思ハるゝなり然るに今ハ皆大名の城下となりたるハ追々の征夷大將軍切開き候故と存候まして 上の御威光にて恐多くも 命を蒙り切開き候ハ不肖の身にて少しハ届き可申哉彼北狄ハ開き候國々ハ宗門の礎柱を段々に立候よし我等ハ日本宗にて段々切開キ次第鹿嶋明神にても建立いたし人氣をかため候半と存候

一我等の心を知たる人計も無之候へハ何程親藩にても世評も如何に候へ共これハいふまでも無之定而穩密風聞の類不斷彼地へ立入候て萬一不束のものも候ハ、其時々御察當あるべく候へハ世評もあるましく且ハ一體のべり合にもなるべく候

右北地の事兼々心付又此間申愚通いたし候まゝ心覺に記し候之扱
我一代ニ大事を成べきハ思もよらぬ事にて却て害を生し候事故永
久の振通を專一とし本立の大切なる事ハ駈と定め置其外の事ハ年
を積世を重ねて全備候様無之候ハ大事ハ出來さる事と我等ハ存
候既ニ北狄の夷人ハ此手段にてカムサスカとやらんまで切開き候
を日本の人ハ不心付うかゝ土地をせぶられ候事誠ニ口おしき事
なればたとひ此身ハ雪霜の中にたをれ候とも少しもいとハず忠節
を勵み度本文ニ通彼是と心をくるしめ候へ共たゝみの上の了簡ハ
まづハ無益の事にて實地に取懸り候へハ我等ハ我等だけの工夫も
出來候半今日にも兵亂ある時當家ハ困窮故出馬なり兼候とハいは
れましく一大事と聞候ハ、一騎がけ素肌にて乗出し候ハ武家の
常と存候北地ニ事も今にも被 仰付候へハ家中迄も覺悟究り候故
物事存候外なる事も可有之されハ本文のケ條も其時ハ用ひ兼候事

もあるべく今惡しきと存候事のよろしくなるへきもあるべく何レ
取ごし苦勞いたし候とハ又格別なるへき歟しかし我等か心願ハ所
詮當節叶ハさる事なれハくり返し候も無益なれども先年も寛政の
初より彼是と御評議ありたるか十八九年を経て文化の初ニハ仕法
替になりたる様ニ見ゆれハ我等の願ハ見合せ候とも上の御爲主意
をば通し置たく内密申聞候之

南の事

北地ハ所詮六ヶ敷相見候上ハ南方を願候外無之何レにても願出候ハ恐
入候へ共北地ハ身命をかけ候て彼地へ越候事ゆへ御恩の報ひ様も有之
又四五年も立候ハ、大圖のならしも立其節ハ御助成無之とも届き可申
哉に候へども南方ハ何の(以下缺)

六 藤田東湖書案

天保年間

諸向

蝦夷地之儀ハ御要害之場ニ御打捨難被差置候間此度松前并東西蝦夷地一圓被下候條萬端無御油斷御取計被成候様此度老中上使を以被仰出候右は

上にも兼々御配慮被遊候御儀ゆへ是非思召被爲在候仍ハ此後追々彼地へ引移に可被仰候へ共江水之儀も乍恐御大切之御儀ニ付御人數御配り方等尤御配慮被遊候○以下不明

北地之儀御整ニ罷成候へハ松前家へ御懸合之上第一ニ場所見分之者不被遣候ハ御人數配リハ勿論諸事御便利不宜奉存候間先ツ不取敢御目付御使番并御軍用懸り三役被遣可然奉存候姓名左之通ニてハ如何可有御座候哉

御目付

小山田軍平
近藤次郎左衛門

御使番

結城寅壽
新ニ被仰付
谷佐之衛門
御目付方兼
小山田軍平
桑原幾太郎

御軍用懸

一北地ハ被遣候御家中之儀水戸表之通り御役方表方と分れ居候ハ御軍制之上ニ於て以之外不宜候間すべて武役ニ被遊夫々右之内より出役にて御用相勤候方可然奉存候大圖左之氣味にて可然哉

番頭

小番頭

諸物頭

戦士

與力

一北地へ被遣候御家中之儀水戸表之通御役方表方と分れ居候所ハ以之外
不宜候間すべて武役にて夫々懸り御用を持候方可然被存候大圖左之氣
味にも可有之哉

御家老

奥津所左衛門

番頭にて
若年寄御用人
兼帯

戸田銀次郎
武田彦九郎

場所々々

御先手物頭共

支配を兼

平士

戦士にて夫々
御役方を兼

小役人を兼

與力

手代勤筋兼

同心

小間遣等兼

足輕

石河徳五郎

安嶋彌二郎

杉山千太郎

馬場祐介

木村留次郎

檜山勘衛門

松本茂次郎

秋山長太郎

淺利六之丞

檜山源太郎

松延定之

松軒

御抱にて熱田玄庵

同 齋藤仙九郎

原田兵介

矢野唯之允

石川勝藏

吉村新三郎

小山田軍平

原主一郎

友部正介

安食七兵衛

今井金右衛門

吉成又衛門

鈴木庄藏

大關元次郎

平松茂介

近藤内藏

右へ付屬之下役等ハ夫々右之族ニ爲御撰可然被存候

一右ニ付追ふ北地御收納御座候迄之間ハ是非調達金無之候ハ不相叶候

處御國富豪之ものへ郡宰へ被仰付夫々爲御聞繕可然第一大坂へ不被

仰付候ハ相成間敷所是ハ全く調達一條之儀ニ候ハ御勘定奉行一人

支配召連罷越候ハ、御差支有之間敷哉と奉存候

但體ニ寄大坂并兵庫にて大船被仰付候様相成候も難計候間本文御

勘定奉行相心得可然存候

一御老中方へ御進達之儀都而備前守懸リニ被仰付候方可然存候

一意味入組候儀ハ戸田銀次郎へ被仰付御側衆并松前家へ懸合等都而同人

懸り被 仰付可然存候

一右之外御役人にて北地懸り可被 仰付族大圖左之通りにも可有御座哉

近藤義大夫

武田彦九郎

山口頼母

金子武四郎

國分隆介

相良芳太郎

皆川庄衛門

永井政介

村田理介

吉成十次郎

小林學太郎

七 藤田東湖書案 (推) 弘化三年カ

午二月九日

一學校之儀不容易儀ゆへ御在國之上と相成居候處別紙之通 御筆被遊候
間及判讀候處學風直し候爲學校御取立ハ可然候へ共右ハ會澤杉山カ
上へも申上我々へも申聞有之候所彼黨之者ハ教授懸り不被 仰付候ハ
、望を失人氣搖動騒々敷儀ハ差見候間御模通り宜様御取立ニ不相成候
ハ不可然候間中御殿ニ藤田主書惣司の儀ハ可然候へ共青山父子指
南との御事ハ量介性質重頭教授不得手量太郎ハ温淳ゆへ可然候へ共一
人にてハ手薄く候へハ佐藤捨藏同門人祐介御召抱兩人中御殿御長やへ
引移布衣以上子弟ハ是迄他門にても右へ入門いたし候様御達ニ相成可
然と及了簡様伺候所其通りとの御事にて佐藤物頭以上ニ被遊貳百石可
被下置との御事に候へ共平七承候ニ加州カ千石ニ抱度旨申入候へ共
辭候由に候間捨藏ハ江戸御家中教授被 仰付矢張別宅爲致水戸へ春秋

五十日ツ、罷下候様可然と及了簡申上候所やはり御合力之儘にて被差置御頼にて春秋五十日ツ、罷下り白銀被下可然との思召に付いづれ捨藏内存承候上勝手次第之方可然申上祐介ハ先年の振を以御馬廻召出五石五人扶持被下可然申上候處百石大番量太郎御小納戸列と申上候處御通事との御事御座候旨

一主書へ惣司文武其外音楽等御任との御事にハ候へ共彌其振合ニ相成候ハ、吟味之上追亦可及御相談

一前書之通相成候ハ、主書の癖説を加減たいし候爲平七若年寄御役料貳百石都合五百石ニ被遊本務之方ハ重立候評議之節致出仕與力計御付にて可然旨平七御供にて罷登り候様達置候間いよ／＼右様相成候ハ、御人□□□仰出候様

二月十四日江戸

一學校御取建之儀御尤なる事にハ候へ共館務之族一同氣受不宜模通可申

哉不容易儀尙更此節御長屋御類焼に付ハ一統の氣受にも拘り可申平論之所に候へハ史館勤不歸様子等ニ候へ共此節ハ一統へも拘り候へハ新規御抱入等儀可然候間先ツ兩三年も御見合被遊候脱アルカにとの儀

二月廿四日 御國

一御同心に付申上候處焼失ニ拘り候譯にハ無之御在國中不被 仰出候ハ此上いつ改り可申とも不被 思召他所抱不宜候ハ、量介父子可然被思召 御意候處量介ハ追々申上候通り教師の人物ニ無之旨申上候處左候ハ、祐介量太郎兩人可然其上之處主書平七ニ爲相撰可然との 尊慮に付此節之所ハ不可然とハ存候得ども尙又及御相談候旨

二月廿九日

一御尤にハ候へ共一體御國中ニ學門勝れ候者を御撰史館勤被 仰付置學風不宜候趣別派ニ學校御取立にハ一體之風儀御改可申も不容易儀御居り合何共安心不致其元御了簡之通り元を固め候儀第一に候へ共教授と

史館館勤と楯合候様相成候ハ不宜夫と無限之御知行と申品にハ無之様被存尙又先書之通爰元長や類焼之儀一統氣受ニ相抱候拘カへハ恐入候へ共一同御免相願候旨

三月十五日

一御尤に存候間入御聽候所いつ逆も取行候年柄と申も無之ものに候得ハ矢張御取立勿論杉山千太郎青山小宮三人へ教授可被 仰付旨御意に付及評議候所千太郎ハ告志篇にも被遊候長刀之筆頭ニ有之畢竟右之者長刀用候ゆへ追々長刀も殖候事ニ有之既ニ教授被 仰付候ハ右等之所へも御相當無之且第一學風御直被 思召に付其學風之長たるもの御入にてハ 御主意にも致齟齬候段申上候得ハ夫ハ深き 思召有之候當時會澤杉山類ハ學校之儀申上候所杉山御入被遊候へハ小宮山青山被 仰付於史館異論無之當分左様被遊一兩年過キ杉山御除キ跡へ安積杯の組へ入可被遊候左候へハ波風なく治り可申との御意乍憚御尤にハ候へ共

當分こそ治り可申候へ共御除キ被遊候節又彼是申合起候ハ指見門弟ハ御居置なと願上候様可相成候ハ只今ハ不被 仰付方可然段申上候處左候ハ、此通りとの御意にて別紙之通御下被遊候へ共一體學校之儀御憤内にてさへ諸人了簡區々ニ有之乍恐

上にも御動キも被爲在候程之事にハ畢竟不容易事ゆへケ様ニ居り不申なまなかニ被 仰付候ハ往々不不明様にも存候へ共扱又折角御世話を我々強ク申張候も恐入候間學校杯申事ニ無之學問所杯と號し布衣以上の子弟中 御殿へ相出學問候様相達し右指引の爲青山父子小宮山等へ可被 仰付候へ共量介八郎ハ何れも一向有之候者ゆへ同しくハかけはなれ祐介杯の様なるものハ方可然と申上候處初ハ左様被 思召候へ共彼是申候ゆへ小宮山等ニハ被遊候旨左候ハ、いつれ江府へ申越候様御意被爲在候付米拾五石五人扶持にハ御召抱ニ相成筈之節祐介兩人教

師ニ御立被遊候方可然候間及再評之後祐介同様風聞且内存をも爲御聞
之上否被 仰聞候様此段申進候已上

但御參府近付候間宿繼を以仕立候事

八 藤田東湖書簡「戸田忠太夫返書添附」嘉永二年三月七日

謹啓御安泰奉抔賀候扱六ヶ年來吉兆々々も久しきものにて兎角寸善尺
魔手ニ取らぬ内喜ひ過候へハ害のミ生候ゆへ薄々御承知も御座候半愚
生儀ハハざく引居候のみにて罷過申候然ル處春來碩果南上引續キ
醉哲下向の事情此上如何なる變事到來ハ難測候へ共先々人事を以申候
へハ此度こそ多分無相違心地仕候最早うかく仕居候へハ果して機會
ニ後れ千載一時の場を失ひ候半と此間中日夜焦思之條々左ニ賢慮相伺
候

一御開明の模様どの向ニ發候歟其向ニ寄跡の芝居も一概にハ申兼候處大

抵にハ目當相立不申候もハ相成間敷候へ共第一ハ正論の冤枉を洗ひ雪
め候と姦の罪を打候との二ツにて其外ハ枝葉と存候姦をも存分ニ打正
をも存分ニ舉候へハ土貢無之候へども正ハ是迄十分冤屈仕居候ゆへ七
八分ニ復し候もさへ人の耳目を驚し可申姦ハ十分ニ勢を得居候間三四
分ニ罰し候も嚴刑と可存左候へハ御開明の上丹能兩子抔なまじむニ
こねどり候へハ姦もろくにハ罰し不申又正も一寸二寸ツ、罪をゆるめ
候様成行やはり要路へハ姦黨の毒薄キもの抔をくばり正ハ僅ニ門外へ
出候事相成候のみにていつまでも罪人の名ハぬけ不申隨萬事つまら
ぬありさまニ成行可申と過憂仕候仍愚案仕候に姦を存分ニ打正を存
分ニ復し候ハ難物のみならずたとひ一旦出來候も人氣激し又々甲辰
の覆徹可戒候間悉く姦をハ寛宥ニいたしさるかわり正を相成丈十分ニ
復し候方補劑の第一歟と存候扱其正を復し候も最初の目當肝要にて御
座候半一旦すらと蟄居等御免にいたし其上ニ段々復し候もハ甚六ヶ敷

誠の御ひるきのやう可相成候間やはり最初ニ其名を正くいたし人々御朱印知行又ハ御扶持組をハ丸々御復し人々の先格ニ寄夫々相當の立場へ無役にて被差置可然存候實ハ表方等へ直ニ差出候も宜候得共其處ハ一段御まけ候も先々無役にて可然存候尤中衛たり共やはり宵觸にて同顔たり登城にて宜く御座候仍右の辭命別紙ニ通り取調申候武者等一旦おかしく御宥免ニ相成候ハ、最早國事ハだめニ相成候間此事さへ發候へハ後ハ破竹の勢ゆへ却何事をも不被遊じり御覽被遊候のみにて一國風靡柳もこんにやくも皆正論に化し可申歟只々長倉計ハ最初の出來餘程六ヶ敷愚案もいまた付不申候間賢者を仰申候別紙も誠に先夜眠り兼燈下にて曉天迄取調候まゝゆへ定間違ひ等可有之御存分御批正可被下候久しきものにハ候へ共是ハ別秘中の秘漏泄仕候へハ事を破申候間其思召にて御服考可被下候尤御相談整候上にハ尙又碩果へ御熟議被下同人の意見を存分に御取夫のみにて他へハ一切御

相談無之孝經へハ相談仕度候處面談不相成候間不及是非存候碩果ハ一刻も早く鄭にも達候ハ、大キニ御ふまへニ可相成存候碩ハ孝へ面談も相成候間是ハ相談にてよろしき事にハ候へ共孝へ談候得は自ら右連中の坊さま方へも泄候間先々此度ハ御三人のみにて追々模様次第如何様にも相成可申哉と存候此段碩を招き申談し碩ハ御相談申上候様可仕存候處御承知ニ通り何れにも拙宅ハ貴宅も都合不宜候間何卒貴宅へ碩御招キ被下ゆる御相談有之 萬縷御推恕可被下候今日ハ枝葉の論相略し根本のみ申上候已上

三月七日夜認

以下朱書戸田忠大夫返書
此朱點ニ文鄭ノ前書ニ

無漏記し度事

當今ニ人情兼御承知被遊候通甚以不容易候ニ付申上候ケ條思召ニも應し候ハ、何れも御筆を以別ニ御記し被遊候御役方へも御下知被遊候様奉存候外より申上候振ニ相聞候ハ、以後尊慮を以被 仰出候節も疑

惑を生し候而已ならず以後御存外之御患をも生じ旁始終之御爲不可然奉存候御如才

不被爲在御義トハ存候へ共此節柄爲念奉申上候

幕之癖ニホ道理ニ當り候事ニホも耳目ヲ驚し騒々敷事ハ悉く忌候義今ニ始ぬ事ニホ尙當節間者も數人來り居候様奉存候間吳々奸打ハ少しく度を御拔無據分ニ要路ニ居候者ハ何なく先ツ御役御免爲御慎置ニホ追テ其罪條を顯し被仰付候方と奉存候實ハ御對顔濟ニ上なれば御都合よろしくと奉存候

△先ツ右様申上置候方ニホ可然と存候御同意ニ候ハ、御記し上之事

九 藤田東湖書案

嘉永四年七月十六日

辛亥七月十六日

拜見仕候

然ハ家來川又才助儀早速暇申付候様委細尊書へ付札にて御答可申上旨奉畏候先便も仰ニまかせ付札にて御答申上あまり失禮ニ御座候間あらまし御請申上候右ハ五月中頭取新八郎ハ申聞御座候付暇申付候筈尤代り之人出來候迄指置候ても可然哉と同人へも懸合置候内不存寄當御役被仰付間もなく

前中納言様ハ爰元三人へ御書ニ趣私心配ハ勿論御同役へも御心配相かけ候儀委細運ひにて御承知ニ被成候儀と被存候私儀御承知被下候通りのごつ物御役成にて跡も先もまつくら誠ニ心配仕候へども何を申も家來一人の事ニホ江水御同役へ御心配をかけ候ハ重々恐入候間江戸御返書ニかはらず暇申付候心得之旨爰元御同役へ御相談申候事に御座候間乍憚御安心可被下候尤盆中無人にてハ貧用等如何にもさし支候處盆中位ハさし置候も可然と御同役も御申聞に付盆後早速長屋爲引拂候旨申渡候事に御座候扱又暇申付候後出入も不爲仕候様尊書ニ趣も奉畏候へ共此所ハ少々

ぎわく仕候間尊書ニあまへ無伏藏申上候才助儀ハ先年大勢無調法の仲廣
 とハ兼々承り及候へ共以前一ノ町興津取立にて御免後ハ興津役中屋敷へ
 出入目通りへも罷出金子等をもめぐまれ候よし承り役方へ出入仕候程之
 者ニ候ハ、故障有之間敷と例の私獨すましにて召抱候處算筆も達者諸事
 用辨よろしく悴へ讀書相手もいたし助吉事公事等へ立入候へハまじめに
 異見申のべ候風の性しつ夫丈助吉ニハ大ニにらまれ尙又鉞三郎矢之助杯
 とハ少々むきちがひに御座候間私も乍不及かちを取召遣候事にて是迄に
 なきよき家來と存候處御一席御申合をも不存召抱候ハ私行届不申候間早
 速暇申付候儀前文ニ申上候通りに御座候へ共右之通り出精奉公仕候もの
 出入迄さし留候ハ、當人もあまりの事と存此後召抱候もの之勵みにもか
 かり可申候歟と奉存候是又前中納言様へ奉對候も乍恐あまり御あた
 り申上候様にて恐入私心配も何分御推察可被成下候夫ぐるみやハリ出入
 さし留候方よろしく可有御座候哉何とぞ御存分御指圖奉願候右の外へも

此方ニ御座被成候へハいろ／＼御指圖相伺度儀御座候へ共遠方伺候事も
 不相成認候へハ認候ほどごたつき御覽も御めんどくと奉存候間申上殘候
 べ

尙々家來又ハ下女共ニ事ニ付此上萬一助吉等より申上候事御座候歟もし
 れ不申候へ共申上候迄ハ無御座候へ共助吉等の氣ニ入候者計さし置候様
 にてハ家の爲にも不相成事も出来可申歟と當御役にてハ別心心配仕候兼
 て御ふくみ候様奉願候べ

岡田
朝比奈

なかた
ムホヤ
あさひな
女ソアヲへ書案
七月十六日

一〇 藤田東湖書案

嘉永四年八月

辛亥八月八日

藤田東湖書案（嘉永四年八月）